

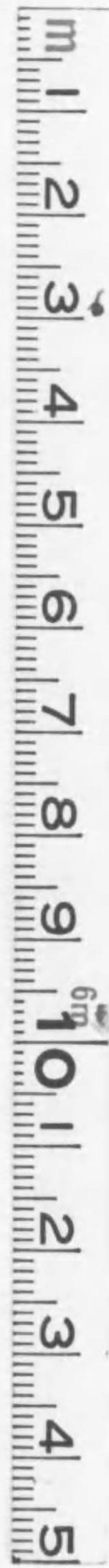
愛は輝く

白衣の天使感激を語る座談會
中支戦線を訪ねて
従軍看護婦の手記



特252

743



始



特252
743



は

輝

く



皇后宮御歌

あはれはら乃

神もまるとまをた

つあに

いたるふたむむ

万々々々々

身成



蘇州の銀座街



上海散島の庭

るう譜に蘇の婦産者職明
(海上) 事主藤佐



蘇州新風園



大運の理の
(監事) 長 藤 佐 藤



蘇州の女巡警



蘇州の北寺の塔

我が宛登に叩き活されに敵機の残骸



戦時救護は赤十字の第一の使命であります。今次事變の勃發このかた、赤十字救護班は軍の命によりまして、あるひは戦地に、あるひは病院船に、あるひはまた、内地陸海軍病院に配屬され、平素おそかに鍛へられた精神力と技倆とを發揮して、白衣奉公に邁進いたし今日にいたつてをります。

而してこの雄々しい御奉公のうちには、涙ぐましい労苦もかす／＼包まれてゐますが自分たちが看護にあたつてゐる、忠誠に凝つた傷病勇士たちの魂にはげまされては、その労苦もうちわすれて、常時には考へもおよばなかつた献身の御奉公ができたといふのが、班員の述懐です。

大場鎮陥落後の凄惨なる兵站病院に飛びこんで、爾來一年有半、現地の勤務に終始した兵庫支部派遣の救護班が、交替のため歸還して來た機會に、神戸新聞社が主催でお

はしがき



南京光華門外



西湖畔(杭州)

楊子江を渡る今日はもう四日目



奉公！三三三三三



九江に着いた交替救護班



密の武装(武昌)

蕪湖の街裏



姑蘇城外寒山寺



古寒山寺

こなはれた感激をかたる座談會の記事と、班員の手記と、それから中支方面の皇軍慰問と、赤十字救護班の勤務の状況を視察のため、赤十字本社から派遣された兵庫支部の佐藤主事の中支戦線視察餘録とをこゝに載せて、白衣の勇士と白衣の天使の忠誠と勞苦を偲ぶことにしたのであります。

昭和十四年九月

編 者 識

目 次

一、白衣の天使感激を語る座談會……………(一)

▽彈雨の洗禮——上陸第一歩▽夢に見た令狀——日頃の念願▽聴け重傷兵が吐く愛國の言葉▽忘れられぬ嬉しさ▽部隊長の情けに失明の手で禮狀▽慰問演藝の復唱——動けぬ重傷者へ▽強い、本當に強い——日本の兵隊さん▽戦塵を洗ひ故國に送る——白衣の勇士▽尊き青春の犠牲▽かくも献身的なわが野戦醫術▽役目果した感慨▽前線の醫療に手落はない

二、中支戦線を訪ねて……………日本赤十字社 兵庫支部主事 佐藤久助……………(三)

◎上 海(一)……………(三)

▽針だらけの旅仕度▽上海は近い▽敵機の盲爆ぶり▽上陸劈頭に敵彈▽慘憺たる上海の戦跡▽白衣の勇士と白衣の天使

◎上 海(二)……………(三四)

▽陸戦隊本部を訪れて▽われ乍ら頼しい看護婦達▽上海戦跡断片▽抗日テロの本場

◎力強い興亞の歩み……………(四〇)

▽南京への汽車▽宣撫班の苦心▽ある將校の心配▽南京近し▽新秩序への嬉しい發足

◎南京の自然と戦跡……………(四六)

▽赤十字魂の権化▽激戦を物語る弾痕の南京▽美しい城外の自然▽中山陵▽懐しい郷土勇士の樂書

◎長江とところどころ……………(五三)

▽大揚子江を湖る▽涯しなき單純な眺め▽わが海軍の勞苦▽敵前の白衣勤務▽水と大饗▽食事毎に毒消丸

◎古今の愁を洗淨……………(六〇)

▽九江から漢口へ▽漢口の殷賑▽張り切る兵站▽防諜の必要痛感▽不落の堅壘を誇つた武漢三鎮▽壯麗な武漢大學▽救護班の辭典に『不平』の二字なし

三、從 軍 手 記……………(七一)

①病床の勇士・思ひは戦線へ…………… 救護看護婦 谷水静子…(七一)

②泣きながら看護…………… 同 大西しげの…(七六)

③我慢強い戦傷勇士…………… 同 西山尙子…(七八)

④暇に銃後の歡送…………… 同 同 人…(八〇)

⑤尊い傷病を克服する精神力の偉大さ…………… 同 岩井貞子…(八三)

⑥終生忘れ得ぬ感激…………… 同 清水ちゑ子…(八六)

⑦壯絶笑つて死地へ…………… 同 石原てるゑ…(八八)

⑧眞に貴重な體驗…………… 班長 石川正次…(九〇)

表紙寫眞説明

- ① 錢塘江
- ②④ 南京に於ける日赤救護班
- ③ 日本赤十字社
- ⑤ 杭州西湖畔
- ⑥ 上海市政府
- ⑦ 日本赤十字社兵庫支部
- ⑧ 漢口碼頭
- ⑨ 杭州に於て
- ⑩ 南京ホテル
- ⑪ 武昌の桃

- ⑫ 敵が漢口に捨て、行つた生々しき爆弾
- ⑬ 漢口の街
- ⑭ 船中で故郷へ便りを書く看護婦達
- ⑮ 南京玄武湖畔
- ⑯ 杭州の防空壕（此の中には大きな室が五ツもあり電氣、水道、通風の設備も完全である）
- ⑰ 右の防空壕は此の大佛殿の裏手に在る
- ⑱ 漢口中山公園の正門

白衣の天使感激を語る座談會



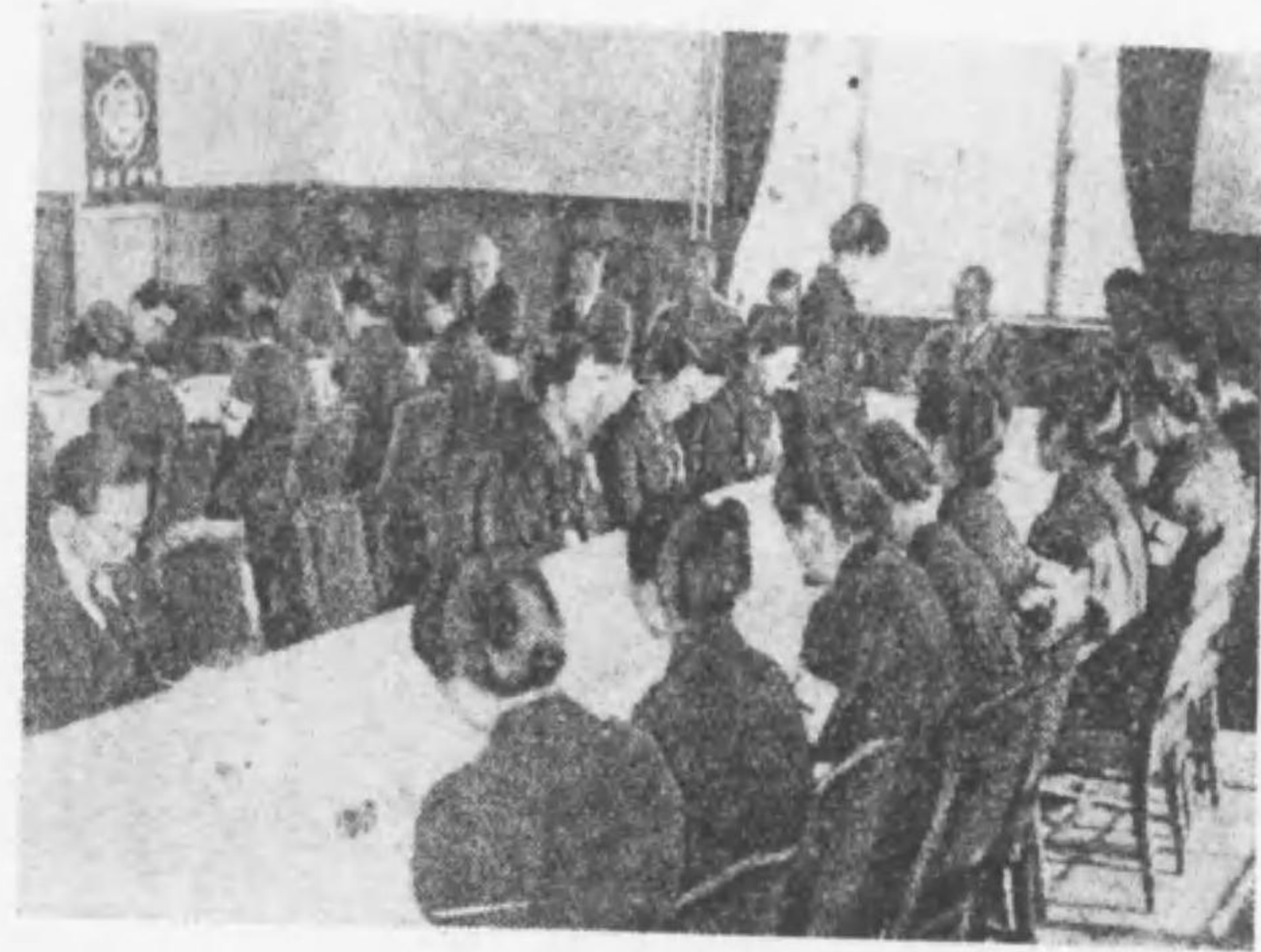
彈雨の洗禮

上陸 第一歩

〔舟橋〕 一年有餘あしかけ三年にわたり、中支方面に於て貴き使命を果された救護班の皆様に対し、銃後國民の一入としてあつく感謝致します。本日、おつかれのところをお集り願ひまして、戦線に於ける

白衣の天使感激を語る座談會

赤十字のマークも輝かしく、一年半ぶりに、中文の戦線から、懐かしい故國に榮ある凱旋をした日本赤十字社兵庫支部の救護班一行の現地の感激を、銃後の人々へ傳へようとして神戸新聞社が主催で、一行の歸還を迎へた第一日、神戸商工會議所の四階ホールで、その感激を聞くの會が催ふされた。



出席者氏名 (敬稱略)

△歸還救護班側

班長 石川正治、書記 船岡博、救護看護班長 小林マツエ、救護看護婦 谷水静子、大西しほ子、岡田はる子、中村ミサ子、香山繁子、稻谷隆雄、池田らの、野村文枝、川カズ子、木庄八重子、石原てる美、伊藤花子、清水ちえ子、岩井貞子、西山尚子、福永よし、小池悦子、石川歌子、高橋きく、小田原とも美、使了 矢野忠太夫

△來賓側

神戸市教育部長 川島 堅太郎
神戸師範区司令部副官 近藤 兵太郎
神戸市陸軍局長 藤 岸 松蔵
神戸市陸軍分隊長 佐藤 喜子
國防婦人會神戸本部 井安田 喜子
共合區第三分會 上東 静子
同 第四分會 同 静子
神戸區第四分會 同 静子
△主催者側
神戸新聞社事業部主任 舟橋 石川 一
同 社會部長兼藝部長 杉本 明
同 記者 野城 伊知郎
△後援者側
日赤兵庫支部主事 佐藤 久助

貴き體驗、生死のあひだを活動なされた辛苦のほどをおうかゞひしたいのは、國民全般の願ひであると存じます。どうか腹藏なくお聞かせ願ひたいと思ひます。

〔佐藤主事〕 このたび、歸還しました第十五救護班は、一昨年九月に應召、たゞちに上海に赴きましたので、あの大場鎮陥落の二十四日前になります、直に上陸しましたが、支那側では救護班員の到着を知つて、赤十字の國際平和標識をも無視し暴民な集中射撃をし



てきたのであります。で班員は
一たん上陸したのでしたが、危
険だと言ふので一同歸船し、上
陸第一夜を迫撃砲なる彈雨の
真中にすごしたのであります。

勤務はその直後より開始されました。大場鎮陥落の
捷報が内地の皆さまを喜ばせてゐるとき、第一線では
戦傷兵の應急救護に班員が文字通りちみぢろの活躍を
してゐたのであります。これが當救護班の輝かしい上
陸第一歩であります。爾來一年有半すべてこの献身的
努力の連続であります。今度の内地歸還には所屬部隊
長より名譽の感謝状と、幾多傷兵の厚い感謝の真心を
戴いて歸りました。

これは當赤十字社兵庫支部の名譽として一般にお傳
へして戴きたいのであります。また本日の座談の席に

〔石川班長〕

平素救護班員として我々が猛訓練を受



けてゐることは申すまでもあり
ません。また一旦緩急の場合お
役に立つ日を待ち、その華々し
い日の臨れを持つてゐたのであ
ります。しかし實戦に参加しま
して、初めて到底内地にゐては想像されぬものである
ことを知りました。

先に佐藤主事が話された上陸第一日の印象が既にさ
うでありました。内地で三年の訓練がその一日で實地

教育された氣がしました。それによつて盡忠奉公の念
はわれ／＼班員一同を奮起させました。その日第一に
手を握らうとした傷兵の一人が、私の差し出した手を
無言に振り拂つて「自分は大丈夫だ、戦ひはごうなつ
た、まだお國に盡さねばならぬ」と立ち上らうとする
のを見て、私は思はず頭をさげ不覺の涙をうかべ、爲
すところを知らなかつたほどであります。第一線の勇
士は皆この意氣であります。私達は此等の勇士に誠を
捧げえたのでありまして、その喜びと此の感激は私達
の子孫に傳へたいとおもひます。

夢に見た令狀

日頃の念願

〔小林婦長〕 赤十字看護婦として戦線へ派遣される
のが日頃の念願でありました。その願ひが果されてこ



れ以上の喜びはありません。各
自が日頃訓練した事を實戦に役
立て、赤十字の一員として當然
なすべきことを果たしたといふに
過ぎませんのに、早速このやう
な歓迎の席を設け下さいました事など、なんと申して
よいか言葉に表はせないのであります。只一同が健康
で歸還出来ました事は、これ以上の喜びは御座いませ
ん。

〔岩井貞子〕

婦長さんと同じく命をかけて働くこと

が出来てこれ以上の喜びはありません。召集の日まで
どんなに待ち遠しく思つたか知れませんが、すでに先輩
同僚の方には召集が来てゐるのを羨ましく思ひ、召集
令狀の来た夢を幾度か見、寝られぬ夜が幾度かありま



念頭にありませんでした。皆様と同じやうに生還は勿論期して居ませんが、戦地到着前の宿泊地で初めて自分の身を振りかへつて見ました。其處で初めて私事ながら父母に手紙を書き形見に髪の毛を剪つて同封しました、そして上陸第一歩に受けた銃砲弾の洗禮で家のこと父母のこと自分の身など私事は全然忘れてしまつたのでした。

【大西しげの】 一昨年の九月廿一日に召集令状を受取つた際の感じは今もなほ忘れられません。どう云つ

達に、あれもして上げたいこれもして上げたいと氣は焦るのですが、重症の方に手がかゝつて軽症の方には本當に申譯ないのです。午後四時になれば病棟から引き揚げることになつてゐるのです。然しそれは極く最近になつてからのことで、大概毎晩七時か八時ごろまで病棟に残り夕食に歸つた時分はもう御飯が冷たくなつてゐたことが多う御座いました。

入浴も最初のうち水が不自由で許されず、そのまゝ八時半に點呼を受け九時消燈、寢に就くのです。然し私達が参りました當時は長崎班の特志看護婦さんがほんの少數来て居られただけで手不足なため、朝は五時ごろ飛び起きてすぐ病室へ行つたのでした。患者さんは一疊に一人と云ふ割當ですが、その時分は病床不足でたいてい一疊に二人寝てゐられた位ですから、診療から患者さんの身の廻り一切を終へて宿舎へ歸るのは

ました。



ていゝか感慨無量と云ふのはあの時のことでせう。令状を手にした時今こそ三ヶ年間教育をうけた赤十字精神を存分に發揮する時が来たのだと深く決心致しました。

【西山尚子】

私達の現地における勤務の状況を申し上げますと、兵隊さんと同じく午前六時起床、ラッパの合圖で起き、身支度を整へ七時十分に整列して點呼をうけます。それから室内の清掃、整頓をして朝食を頂き、お食事が終わると直ぐ病棟へ驅けて行つて患者さんの診療看護にあたります。軀の不自由な患者さん



大抵深夜の二時、三時になりました。その上宿直があつて夕番と明番と毎晩二人づゝ不寝番で病室の見廻り、火の要心から萬一に備へて全責任を負うてやりました。

聽け重傷兵が吐く

愛國の言葉



【香山賢子】 本院といつてもまだ開設されて間もなかつたので醫療機械も揃はず、藥品その他の材料も充分ありません、汚い話ですが便器もないのでその邊から手頃のものを探して来る始末でした。

丁度大場鎮陥落のまへで重傷の患者さんが續々還送されて来る、その兵隊さん達が預傷の苦しみをこら

へ、後送されるのは残念だ、早く前線へ出たいと望まれる姿を見ては涙がこぼれ、どうかして一日も早く元の元氣な態に癒してあげたいと強く決心しました。

〔池田うめ〕 最初の二、三日は餘りひどい負傷者は



ありませんでしたが、大場鎮の攻略が始まつてからひどくなり、頭髪も、髭もいつぱい伸びたこの人が、内地を出る時、歡呼の聲に送られて出發した勇ましい兵隊さんだと思ふと、胸が迫り私達の任務の重大さを感じて一層勇気づけられました。

〔中村みさ子〕 こんなに重い傷病兵でも一言も自分の身内のことは口に出さず部下のことや、責任のこと



〔清水ちよ子〕 一番苦しかったのは上陸してから十八日間も入浴は勿論洗濯さへ出来なかつたことでした。

忘れられぬ嬉しさ

〔舟橋事業部主任〕 ながい間の御苦労でした。でせうが、その間にもあの時は嬉しかったと思ひ出される事があるでせう。そんなお話を一つ……。

〔佐用カズ子〕 嬉しかった事つて、さあ言つていゝか知らん……（とそばを振りかへる、誰れか「言ひなさいよと小聲で合つちを打つたので……」）ちや申しま



ばかり氣に掛けベッドに寝ても絶えず戦線へ心を馳せてゐられる様子を見るにつけ、日本の兵隊さんは本當にこれで強いのだと感激しました。

〔谷水静子〕

前線から還送されて来た患者さんが、不自由な態で戦友同士お互ひに助け合つてゐられる友情には、私達の苦しさなんか押し飛んでしまひました。自分はまだ死に瀕してをりながら、隣の戦友に手を差のべて氣持を慰めてをられたりするのを見ては泣かされます。自分の貰つたものでも、先づ重傷者に配つて下さいませ。さうした温い氣持で戦友同士



す。これは私事なのですけれど、陸してあの大戦で私達も兵隊さんと同じようにへとへとになつてしまつて、やつと一週間目に仕事が一付き、班長さんだけが外出なさいましたが、そのお土産に私達へお饅頭を買つて歸つて下さいました。勿論一つづつでしたがその時のお饅頭の美味しかった事……（そばの一人が想ひ出してクス／＼笑ひ出すと今まで緊張して居た一同がこらへかたて笑ひ出した。しかし當時を偲ぶ嬉し涙の露がヒカリと光つた）
あの味だけは一生忘れません。班長さんに此處で、一度お饅頭のお禮を申し上げます。やはり私達も活動が過ぎ糖分の缺乏が甚だしかつたと思ひます。

〔佐藤主事〕 石川班長が若いに似ず思ひやりが深くよく気がつかれたので班員一同が心を一つにしお互に援け合つて任務を完全に遂行出来たのです。

〔佐用カズ子〕 その次ぎに嬉しかったことはお風呂です。着いてから十七日目にトタン板を寄せ集めたやうな桶に炊事場の方からお湯をもらつて来て、それも大切なお湯の事ですからホンの五寸ばかり足りくびがつかるほどのお湯で體を洗つてサツパリ着かへた時のすがくしい氣持は忘れられません。

〔佐藤主事〕 これは男子の方で一寸想像がつきかぬ點ですが随分みなこれで苦勞したやうです、よく通信には初めて髪を結ぶ隙が出来て嬉しかったと言つて來ましたが、女らしい喜びを想像してあげて下さい。

部隊長の情に

失明の手で禮狀

れを私達がおなだめするのに苦しむ事が度々でした。



〔岡田はる子〕 恢復なさる方のなかでも、お氣の毒なのは失明された方ですが、私の持った室に〇〇部隊長がお見えになり、御自身も腕の骨折でありながら、この室で一番氣の毒な兵はだれだと訪ねられ、失明された方の傍に寄り傷ついた自分のお手に失明の方の手をそへ見舞の品をお渡しになるのを見て泣きました。閣下はその後もしばしばお見舞を下さいますのでその方がお禮の手紙を認めたいと言はれ、左手に箸箱を持ち、それで字ならびをはかつて、右手で見えぬながら立派な字を書きお禮狀をお出しになりました。そし



て「どうだうまく書けたか……これで失禮にならず閣下にも喜んで戴ける」と仰言る、私も嬉し涙にくれてその手紙を押し戴きました。

〔稲谷壽福〕

ほんとに嬉しかったこと悲しかったこととすべて銃砲聲の轟くうちでした。しかし上陸と同時に砲撃を受けたときは正直に怖くてビクビクでした。どの弾丸もどの弾丸も私達の病院をねらつて撃つてくるやうです。その上敵機の空襲で炊事場に一發落ちた時はひやッとしてしまいましたが、それが怖かつた最後です。

もうあくる日の朝になつて明るい陽の光を見ると、昨夜の怖氣はどこかへ消しとんでしまつて平氣になり

ました。彈丸は昨日と同じやうにどん／＼病院目がけて唸つて來てゐるのですが、少しも怖いと思ひません。しまひには彈の音がしないと戦地らしくピンとした心の緊張がなくなつて、今日は靜かだ何んだか物足りな

慰問演藝の復唱

動けぬ重傷者へ



〔野村文枝〕

負傷兵の方がお互に慰め合つて力を付けてられるのを私達が傍から見ている。居ていつも涙を流します。私の受け持った室が、ある時、搬送患者の方ばかりでした（…御存知のない方に搬送患者とは負傷なさつて自分ではどうしても歩けない重傷の方を擔架で後方病院へお送りするからこの名があります…）一

ッドを動かしました。

と言つても軍曹の方も負傷の身です、そばの私達ははしやぎが過ぎないかとハラ／＼しながらもお止め申

「白衣の天使」を謳ふ

病床で勇士が捧ぐ感謝の歌

「看護婦さんよ有難う」

姫路陸軍病院姫山分院の二番病棟東に入院中の堀和魁一等兵は中支戦線に活躍した勇士で不幸病を得て内地歸還となつたが病床四ヶ月餘の間しみ／＼感謝したことは前線將士にも劣らぬ「白衣の天使」の活躍振りだつたとしてこのほど福原中尉の検閲を経てのち左記歌詩を本社神戸支局に寄稿した。

【看護婦さんよ有難う】

(一) 富士に積つた白雪の、清き姿をそのまゝに、

室〇〇名全部が身動きも難かしい方ばかりでした。それですからたとひ病院へ演藝慰問隊などが來しても私の部屋の方は誰もそれが見られぬのです。遠くの娯樂室で起る拍手の音や、嘶の賑やかな音が聞えて來ながら見られないのです。その齒がゆさは何んとも申しようありません。たゞ一人軍曹の方で幸ひやつと歩ける位に傷が恢復なさつて居たのです……「ちやワシが代表で楽しんで來てやる」と救護班の許を得て行かれましたが、演藝の模様を詳細に書きとめ、室に歸つて來ると室の真中に立たれて「オイ皆さん、俺が今から見て來た慰問の復唱をやるから、見て居て樂しめ」と大聲に言つて、今見て來たばかりの白科や踊子の手ぶり、漫才の顔つきをそのまゝに面白をかしく真似て一同を喜ばせました。體の動けない方は首だけ、上體の起きる方は「早く起してくれ」と私達も大あわてにべ

す事も出來ず、ただ嬉しいのと悲しいのとをかしいのと泣笑ひました。

赤き心を白妙の、衣に包む國の花、看護婦さんよ有難う

(二) 勇士のみとり雄々しくも、家をも身をも振り捨て、やさしき母や又姉と、真心燃ゆる國の花、看護婦さんよ有難う

(三) 炎熱肌を焦す日も、かよわき力よく協せ、女といへども命がけ、尊く匂ふ國の花、看護婦さんよ有難う

(四) 吐息も凍る冬の夜も、使命果して皇國の、兵士に劣らぬ凛々しさは、ゆかしく匂ふ國の花、看護婦さんよ有難う

(五) 御被威輝く櫻花、御國に盡す真心を、ほまれも高き看護婦と、こそりて匂ふ國の花、看護婦さんよ有難う

(昭和十四年六月二十二日大阪朝日神戸支局所載)

強い、本當に強い

日本の兵隊さん



〔本庄八重子〕 なんと言つても弾丸の傷です。ふだんの外科治療とは比較にならない。苦痛である事は皆さんにも御推察して戴けると思ひます。私はレントゲン写真の係りをして居ましたが、殆どの方は弾丸がどの骨を傷めて居るか、弾丸が体内の何處にあるかを知る写真を撮つて手術處置をせねばなりません。それでレントゲン機械にかゝるやう無理にも體を動かさねばならぬのですが、誰れ一人として痛いと言ふ事を言はれません。死ぬ事を思へばなんだと齒を喰ひしげつて居られる。強い本當に強い、私は日本の兵隊さんの強さが此處にあると感じました。單に痛いと呼ばれない



〔石原てるあ〕

弾の傷の外科患者と共に大場鎮の時は下痢患者がかなりありました。が病院にはいつて二、三日するともう第一線に出る、隊に遅れ残されるのは残念だと喧ましく退院を願はれます。これには救護班でも困りました。退院しても内地と同じように養生が出来ればよろしいが、それは到底だめです。そのうち一人がやつと出發なざる許可が出ましたが、その日はどしや降りの雨です。これはいけない、せめて天氣になつてからと、私達は泣くやうにしてお止めした

のですが、どうしても征くと、私がこしらへて差し上げる梅干のはいつた挿飾二つを大事に飯盒に入れ、雨の中を出發なさつたのです。虫が知らしたと言ふのでせう、止めた甲斐もなくその數日後戦死されました。



〔伊藤花子〕

お世話した兵隊さんの一人々々を想ひ出すと胸がいつぱいになつていまお話が出来ません。



〔福永よし〕

忙しい事は到底言葉で言へぬほどで負傷者の數とか病院の收容數は申上げられませんが、とに角、一時は一杯でした。第一線から後送された軍服の儘の方を次々に私達が擔ぎあげて服をぬがせ傷をまづ洗はねばなりません。大きな體の方など普段の力では抱き起しも出来ないのですが、その時ばかりは自分ながら大へんな力が出たと思ひます、朝目があくとき、自分の顔を洗ふのももごかしい位で、病舎にかけつけますと、患者の方がもう目をさまして、顔をふいて下さい、枕を動かして下さいと寝起きの子供のやうにせがまれる、大小便器のどれもが一夜のうちで皆一杯になつて居る。それがすまない間にもう食事を出すすよう急いで來ます。患者に食事をさせるのに大へん

戦塵を洗ひ故國に送る

白衣の勇士

〔舟橋〕 無理もない言葉だと思ひます、では福永さん方面をかへて勤務状態についてお話していただきますか。

な時間がかつて私達の食事の時間はとつくに過ぎ、早や廻診の時間です、朝と暮の食事が一緒になつて了つても私達は我慢しますが、それだけ忙しく働いても手がとまかなかつたのです。下痢患者が多かつた時は特に忙しく、尾籠な話ですが大便をなさる世話に手が廻りかねます。患者は皆手足の不自由な方です、どうしても此方がお世話出来ませんと、隣のベッドで寝て居られる足は不自由でも手の利く方が、大便の世話をなさつて下さるのです。

「お互ひだよ、なにかまはん」

と助け合ふ勇士の方を見て居てつらかつた事が度々です。どうしても手が足りない、もつとく内地から救護班に来て戴かねばならんと其の時は口惜しがりました。そんなわけで晝の勤務時間が七時までであつても九時まで、も全部片付きません。皆が寝られるまで十

一時、十二時、一時までが晝の時間です。たまに十二時ごろ私達救護班の部屋に歸つて見ても廿何名の班員の誰れも居ません、けふは私が一番早かつたと思ふとドツと疲れが出て、故國への感傷など考へる暇もなく寝込んでしまつたものです。誰れもがさうで救護班員同士何日も言葉一つ交はさずに過して來ました。

たゞこれだけはどの兵隊さんにもお世話出來た事があります、それは白衣の勇士となつて内地へ運送ときまつた患者さんには、身體全體の戰塵を洗つて新しい白衣をお着せするのですが、白衣はとにかく身體が洗へない方があります。だがその方でも、足だけは綺麗に洗つてさしあげる事にきめて居ました。どのやうに忙しい時でも、それだけは車の後を追つてもします。勇士の両親や家族の方がこんなに汚れた身體をして……と私達の心遣ひの足らないのを責められる心地

が致しまして……

〔小田原トモ子〕



前線から傷ついて運送されて來られる兵隊さんが、頁傷して後方へ下るのをごんなに残念がつてゐられるか傍の見る目も同情の涙がこぼれます。私達としまして傷ついた方に少しでも滋養の攝れるものと思つてスープに卵の黃身を一つ落して差上げましたら「なんの働きも出來なかつたのにこんな甘いものを頂いて 天皇陛下に濟まぬ、國家に對して濟まぬ」とスープ皿を頂いて飲んでゐられました。

尊き青春の犠牲

〔福岡書記〕

大場鎮陥落直前に上陸しましたので



を作りました。

私達の班はあの激戦にいきなり遭遇、ごん／＼後送されて參ります頁傷兵は、遂に十一月二十六日の大場鎮陥落の日など、兵站病院として收容兵數の記録を看護婦も何しろ勤務が一年七ヶ月の長期に亘りましたので、當時みな年も若く最低廿三歳が一名、廿四歳が一名で廿五と廿六が主で赤十字看護婦としてはもつて來いの働き盛りの齡だつたのが、足掛け三年の間にすつかり年を取つてお婆さんになつてしまひました。へくす／＼各所で忍笑が聞える今此處にある人達のうちで既に妹さんの方が一足お先へ縁付いたのが四名もあります。若き血に燃ゆる青春を犠牲にして働いて來られたので婚期が遅れて誠にお氣の毒な様な氣がし

ます。(笑聲)本當の話ですよ、唯今此の席へ御列席になつてゐられる方はいづれも各種團體の幹部の方々ばかりでありますので、お願ひ致しますが、此の看護婦さん達によい配選者がありましたらごんくお世話下さつて申込んで頂き度い、これは此の席上ばかりでなく廣く國民に訴へたいのです。

〔大越傷動會長〕



いものすな。

婚期が遅れたことは誠にお氣の毒ですが、かう見渡した處皆さん却々張切つてオールド・ミスの様な感じのする方は一人も見えない、これは一つ愛國、國防の婦人團體の方にお骨折り願ひた

かくも献身的な

わが野戦醫術

〔稲岡書記〕 どうぞ宜しくお願ひします。次に既に神戸新聞に掲載されたことですが石川班長の手術に就いて一寸お話しします。

昨年の十月十七日の神嘗祭當日の出来事として、丁度その日部隊本部の廣場に娯樂の映寫會があつたので患者も救護班も全部見に行つてしまつた。誰も居ない後で田原少尉の頸動脈痛切開の大手術があつたので、詳しい様子はもう新聞に出てゐましたので省きますが、午後一時ごろから手術を始めて終つたのが午後十時、その間前後九時間真暗な本院の、手術室だけが煌々と電氣をつけて、その下で世界野戦醫界のレコードを樹立する大手術が行はれてゐた感激的な光景は、日本の野戦醫術はこんなに献身的で立派なものだと銃

後の國民に見せたかつたです。

手術が済んだ時は全身すつかり冷たくなつて、生きてゐるのか死んでゐるのか分らない少尉の軀を、全身繙帯で包み三病棟の將校室に移し、清水、大西、稻垣岩井の四名が十日間交替で不續番に立ち、とうく離手術を成果あらしめた努力は實に偉いものです。最近本人から班長殿に届いた書簡によりますと最早メンを握つて字が書けるまでに回復したから刀を握つて第一線へ復歸出来るのも間もないと喜んで來てゐました。

〔大西しげの〕

〇〇部隊の廣部少尉さんは胸部貫通銃創で、もう傷の方は良くなつて、平常はさしつかへないのでですが、内地へ療養に運送されるのは嫌だ第一線の原隊へ歸り度い／＼と班長殿に何回も何回も願つて

をられました。或る日外出したまゝ、夕方になつても歸つて來られないので、もしやと案じてゐると、矢張り同室の戦友へ夕方の五時ごろになつたら渡せと監手紙し病院へはもう歸らないと云ひ残して出られてゐました。

直ぐに部隊の方から捜査隊を出して探したところが北停車場まで行つて汽車に乗り胸のマークがあると曝れるのでむしり取り隅の方で澄まして腰掛けてゐたさうです。其處へ憲兵が探しに來て手帳に控へた少尉の人相や軍刀の長さを照し合し「廣部少尉殿ではありませんか」と訊ねても知らぬ顔をなさつてゐた處へ丁度〇〇部隊の顔見知りの兵が乗り合せ、何も知らないもんですから廣部少尉殿ではありませんかと聲を掛けましたのですつかり判つてしまつたのです。憲兵隊から見つかつた電話があつたので班長殿が直ぐ迎へに行つて

連れて歸られたのですが、この方は名古屋高工の出身で戦争が済んでも内地へは還らず大陸へ進出するのだと云つてゐられました。

役目果した感慨



〔石川歌子〕

戦線衛生救護の重大任務をつゝがなく

果して内地へ歸還した時一番嬉しかったのは、上陸第一歩の埠頭へ出迎へて下さつた小學生や婦人會の方々に接した事です。

お役目を果して無事に還つて来たなと沁々心に感じました。現地で兵隊さんと同じ夢飯ばかり頂いてゐたので旅館で始めて白い御飯を頂いた時は懐しくつて涙がこぼれました。内地は物資が缺乏してとても皮の靴などないだらうと思つて靴を買つ

て歸つて來ましたが、デパートの陳列棚にすらりと並んだ靴や綺麗な呉服類には驚きました。

〔高橋きく〕

愈よ歸還することになつた時私達の到着前から入院されてゐる古い患者さんを残して先へ歸るのだと思ふと何だか悪い氣がしてとても辛うございました。



〔矢野使丁〕

私も六十二歳になりますが、どうやら無事にお務めさして頂いて來ました。吃驚したのは上陸した四日のお晝時に飯を取りに來いと云ふので行きますと馬穴に入れてありまして、その上に何やら



看護婦の手を助けたか分りません。それから病院で作つた馬穴の穴のあいた廢品が澤山出來て皆捨て、しまふのですが矢野君は泥をこねてその中に塗り腫爛を幾つもく作つたのです。寒い時分これがストーブの代りに大變役立ちました。また風呂を焚いたのちの新がら消炭を作るなど戦用物資の節限供給に骨身惜まず努めた功績は實際敬服に價します。

前線の醫療に

手落ちはない

〔石川班長〕

醫療材料はどんな状況にあるか一寸申上げてみますと機具設備の方は新しいのが出來てゐるさうですが現地ではまだ使つてゐません。私達は自分

獨特の機具を使用してゐました。薬品は各國からどんく集つて來るので内地に無い薬も多數ありますが、患者が一度に送られて來た場合は醫療材料が不足しま

黒いものが一杯のせてあるので、何だらうとよくみますと、何とそれは蠅がたかつてゐたのです。こりや大變な處だと驚きました。始めは看護婦さん達もとても汚くて食べられなかつたが、だんく、夢飯になれて來ると皆さんが美味しくと食べて下さるのが私達炊事當番にとつて何より嬉しかつたです。寄宿舍は始めはがらん洞の空屋で皆板の間へ黒い毛布を敷いてごろ寝してゐたんですが、これではたまらんと、近くの民家へ行つてテーブルや椅子を借りて來て、ごうやら家らしい處まで道具を揃へるのに一苦勞しました。

〔稻岡書記〕

矢野君は部隊中でも一番老年でしたが

實によく働いたものです。他の班では看護婦が交替で炊事當番に當るのですが、當班では矢野君が始めから終ひまで一手に引受けて呉れたので、これがどれだけ

すが暫く待つと送つて來ます。これは輸送力が足らないためでせう。

なほこれは軍部に對する希望ですが國民の義務を果すため自ら進んで従軍したものでお手傳ひに行つてゐる様な悠長な氣持ではないのですから軍部も遠慮なく使つて頂き度いのです。私達は陸軍病院の看護婦と違つて皆女學校も出て三年間の看護婦教育をうけ看護婦としてはこの上無い立派な資格をもつてゐるものばかりなのですから、監督とか指導、教育をなくとも仕事さへ與へて貰へば幾らでも働きます、看護に關しては一切任せてもらつて過ちないので衛生兵に對すると同じ能力を持つてゐるものと信じて頂きたいのです。

〔佐藤憲兵准尉〕 患者の最も要求するものはどんなものでせう。



〔小池悦子〕 上海では患者の欲しかられるものはないていふたされてゐるやうです。

〔石川班長〕 外國の軍事専門家が衛生施設を視察にきて娛樂機關が少いと云つたさうですが、現在は一千人も二千人も收容出来る演藝場も出來て、週一回か二回内地から來た慰問隊の演藝や映寫會が催されます。病院の設置は個々としてよく出來てゐますが前線はまだ手薄のやうです。

〔舟橋主任〕 お疲れのところ長時間ありがとうございしました。女性でさへも、前線將兵に劣らぬ、この立派な働きをなさつたこの有益な記録を、一般銃後の人々に報道いたします。(まはり)

中支戰線を訪れて

佐藤久助

自分は、日本赤十字社から、中支方面の皇軍の慰問と、赤十字救護班の勤務状況の視察を命ぜられ、全国から選ばれた他の四名の者と共に、三月二十四日神戸を出帆、上海、南京、九江、漢口、武昌などを訪れ、歸りには更に、蕪湖、蘇州、杭州に立寄り四月十八日に歸神したのである。

本文は即ち長江を溯る船の中や、南京から杭州、杭州から上海への車中で物した慰問視察記録である。

上 海 (一)

針だらけの旅仕度

あべこべに、これが支那から日本へ旅するのであつたら、金の用意ができて、乗りこむ船さへきまれば、あとは未見の土地の幻想を描いて、鹿島立ちの日を待つて居ればよいのだが、支那への旅行が、今更に退儀なものであることを知つた。

うゑほうそうは、幸にこの間すましてあつたのだが出帆まで日数もないのに、更にコレラ、赤痢、チブス、バラチブスと幾つかの豫防注射をやつて貰はねばならぬのである。やむをえない、殆ど毎日のやうに腕や背中に針を打ち込んで貰つた。うゑほうそうは、珍らしくも善感して、鬼の臍のやうなものが四つも出来、三十八度もの熱を三日も續けたので、矢つぎばやの幾つかの豫防注射を可なり怖れたのだが、幸にヒドクはならなかつた。

自分の場合はそれでも注射の期間が七八日もあつたのだが、これが赤十字救護看護婦となると、電報で召集されて、あと三日か四日の間に、うゑほうそうから、その幾つかの豫防注射までも一時にやつてしまはねばならぬのである。だから、中には四十度も熱を出すものがある。通常なれば、とても頭も上らぬのだがそこは、かうし

た場合の心がけを十分に叩き込まれてゐる彼女等である。フラ／＼しながらも勇敢に團體行動の中に足並をそろへて行くのである。何れにしても支那へ渡ることの厄介至極なものであることを知つた。その上、用心深くするにはなほ幾通りかの薬品を携帯せよとのことだ。中支方面へ行くには、ことにマラリヤの對症劑を忘れてはならぬとのことだ。果してそれほごまでの用心が必要なのかどうか、神經質すぎるやうに思つたのだが、自分は兎に角萬全の準備を調べ、今更ながら日本の生活に感謝の氣持を新たにしておつて神戸を出帆したのである。

上海は近い

船は鎌倉丸だ、現在、日本のもつ最優秀船で、神戸から、たつた中二晩で上海で降ろされるのが惜しいやうな氣のする船だ、遠いやうに思つてる上海も、かうして見ると實に近いものだ。三日目の午後三時過ぎには、一名郵船棧橋と呼ばれてゐる瀟山碼頭に着いたのである。黃浦江に入る時から、日章旗を翻してゐる船の往きかふことが漸く頻繁になり、碼頭に近づくと、大小實に無数の船だが、何れも日の丸をヒラヒラさせてゐて全く感激の旗波だ。それ等の船の人々は、兵隊であつたり、船員であつたり、人夫らしい人であつたりだが、或る者は帽子を振り、或る者は両手をあげて、吾々の船を懐かしさうに迎へてくれた。

碼頭は亦、迎への人々で一ぱいだ。自分達一行は迎へに来てくれた人々と共に、此の混雑した人なみを押しわけて、漸く上海の街に飛び出したのだが、初めての土地なのに、あちらの街角、こちらの街並が、既に上海市街

戦のニュース映畫でおなじみなところなので、非常に興趣をそゝられた。自分達は此の日早速兵站司令部を訪れ翌朝は更に兵站病院を見舞ふたのである。

敵機の盲爆ぶり

事變直後の八月十四日のことである。〇〇丸が當時、重慶から避難民を乗せて上海へ歸り、そのまゝ黃浦港に繋船してゐたとき、上空に五六臺の飛行機がやつて來たので、日本の飛行機だとばかり思ひ込んで私は双眼鏡をとりだして彼等の飛び廻るのを物珍らしく眺めてゐましたよ。と、小林船長が自分達に語るののである。

「随分高いところを飛ぶなど見てゐると、彼等はだんだん飛行場の上の方へ飛んで行きましたよ。」

やがて又こちらの方へ方向を轉換して來たので、少し變だなと思つた瞬間です。オラオラと黒いものが飛行機から翼のやうに落ちました。

「ヤッ爆弾だ！」と氣づいたときは、私の眼はすでに眩んでしました。私の船と、隣りに繋いであつた船の間に爆弾が落下したんですよ。一瞬の後、我に還つてみると、右側の腹のところが血にべつとり濡つてゐるんです。が何處も痛くありません。彈があたつても、そ



吾輩のてに州蘇

の時は痛くないといふから、どこかやられてゐるに違ひないと思つて、腹のところをあちこちと探つてみたが、やはり傷らしいところがない。すると今度は顔から血がタラタラ流れて来ました。さうだ、顔をやられたのだと気がついて、胸に冷りとするものが流れた。それから、怖る怖る、頬から鼻へ、鼻から眼へ、額へと静かに手をやつて擦つてみた。その指先の、さすりゆく一瞬々々の、怖るしさと言つたらありませんでした。しかし、頬も鼻も何ともありません。眼も額も満足らしいです。やられてない、どこも何ともない、顔はやられてない、大丈夫だぞと、其のときは實に嬉しかつたですな。よく氣をつけてみると、唇が空氣のあほりを喰つて裂けて、そこから血が流れてゐるのでした。側腹は爆弾の破片が矢張り皮をかすめてゐたのです。ところがです。私の立つてゐた場所から、六米ほど離れてゐたところに支那人の船員が、血だらけになつて澄れてゐます。顔が半分に見えないので、不思議に思つて、頭を起してみたのですよ。するとどうです、顔が右前額から、鼻筋を通つて口から額まで、何か鋭利な刃物で、スバリと切つたやうに顔の半分が、飛んでゐるではありませんか、實に驚きました。即死です。も一人は、下腹に親指大の孔があいて、そこから腸やうのものが出てゐましたので、私達が見なして押しこめようとしたが、仲々はいりません。病院に擔ぎ込みましたが、これも間もなく死んでしまいました。支那の飛行機は丸で盲爆をやるのですが、〇〇丸はその外れ弾で〇〇名の死傷者を出したわけです。五十疋位の爆弾でしたらうが、破片が一吋位の厚い鐵枝がブツ通してゐるから恐ろしいものです。

上陸劈頭に敵弾



樹大邊渡(左) 佐大悦嘉(右)

赤十字の救護班が、上海に着いたのは、かうした支那機の盲爆から餘り遠くもない十月三日であつた。大場鎮陥落の丁度二十四日前だ。戦傷者が毎日續々と送られてゐるときた。赤十字の救護班来る、の報が丸で救世主來の思ひであつたと、今南京に居られるが、當時上海に、此の難局に當面して居られた渡邊軍醫大尉が、當時を追憶して語られるのである。

『自分は毎日黃浦江岸に立つて來る船、來る船を物色して救護班を待ちました。それが十月三日です。〇〇丸だ、あれが救護班を乗せてる船だと確めたときは、實に嬉しかつたですな。自分のこれまでの公生活の中で、一番嬉しいと思つたのはあの時でしたな。

實は、看護婦も百人位と思つてたのです。それが四百人からだといふので、すっかり意を強うしましたな。

そして迎へたものも、迎へられたものも、大に張りきつて感激の上陸を見たまではよかつですが、さあ、これからトラックで、愈よ兵站病院へ輸送をはじめようとしてゐると、對岸の浦東から、弾を撃ちだして來たです。赤十字救護班だといふことが分つて撃ちだして來たです。兎に角、危くてダメだから、一旦上陸させた

看護婦を全部船に入れてしまひました。そうして其の晩は、たうとう船に泊めてしまつたのですが、敵は此の船を目がけて、夜中盛んに撃つて來たです。でも幸に一人の怪我人もなく、翌朝それを確めて漸くホツとしたです。それから飛行機で制壓して貰つて、上陸輸送をなし終はせましたが、看護班の諸君も上陸第一歩といふところで敵弾の御見舞を受け、腹を潰したことです。却つてこれで度胸が据つたわけですね。」

なごと話されたのである。看護班員は、兵站病院の任務に就いてからも、病院の建物や、附近の民家に焼夷弾や、迫撃砲弾の炸裂を、屢々見なければならなかつた。何せ浦東の敵陣から三千米位のところにある病院で、當時は丸で野戦病院同様であつたのだ。

時は、しかし、大場鎮陥落の前後だ、多数の患者が、ちき目の先の戦場から送られ、或る時はたつた六時間に〇〇〇〇臺のベットを急造したといふ位だ、度胸も据はつて來たのであらう、實際又、弾の飛來に、ビクビクして居れるときでなかつたとのことだ、本務の看護は無論だが、看護婦達は血にまみれた軍服の洗濯から、炊事の世話まで引受けて、何もかも實に良くやつてくれたと、深谷部隊長が、自分達一行が訪れたときに、話してくれたのである。

愈よ任に就いてから十日ほどといふものは、醫員も看護婦も、午前二時より早く寝に就けるやうな事は全くなく、而も、手飾も、病症日誌の整理も、すべて頼りないローソクの下でなされたのであるが、かうした中



防戦の海上るた滄惶

に、先に宿舎に歸れた看護婦が、それが、何時からはじめられたといふこともなく、全部の人々の寢床を、黙々誰として、布いてやることになつたとのことだ。如何にも日赤の看護看護婦らしい涙の出るはなしだと思つた。深谷部隊長は、勇士の看護には、その本を養ふことが大切だと言つて、看護員のことにも随分勞つてくれた模様だ。看護班も此の理解と情のある部隊長のもとに、喜んで懸命の努力を捧げたのである。戦場の一佳話だ。今日まで二萬一千餘人を原隊へ還しましたよ。これも醫員や看護婦諸君の御蔭でね。と部隊長は満足さうに自分達に話されるのである。

惨澹たる上海の戦跡

さなきだに魔の都、上海である。自分達には、丸で方角も分らぬが、いまだ惨澹たる戦禍の跡だ。自分達が、よくニュース映畫で見た、あの物凄く破壊の有様を、今現実に自分達はこれを観るのである。開北は末だよく見ないが、南市一帶の爆破焼却の跡は最も物凄く、戦争といふものは、かうまでも壊滅的打撃に徹底し得るものかと、今更の如く浩嘆させられることだ。此處では支那名物の蠅でも、焼きつくされてしまつたかと思はれるほど、凄まじい姿だ。が、かうした破壊に徹底したところよりも、弾痕なほ生々しく、生殺し的になつてゐる多數支那家屋の、立ち残つてゐるところ

が却つて物凄いやうだ。そこには戦争の妖陰な悪霊が、まだ残つてゐるやうな気がする。その一屋一屋は、皇軍にとつては全く悪むべきトーチカであつたのだ。上海戦が如何に困難な攻撃戦であつたかは、實に現地へ来てみなければ、逆も分りつこはないと思つた。

白衣の勇士と白衣の天使

勇士の人々の逸話が、もつと聞きたいと、自分達は深谷部隊長にお願ひした。それなら幾らでもありますよと部隊長は次のやうな断をされた。

◇：廣島出身の人で、土屋中尉といふ勇士が大股骨折で、この病院に送られて來たんですが、その後、先生の部下の兵隊がボツボツ送られて來るとその都度濟まない濟まないと言つて、自分の百傷も忘れて、擔架に載せて貰つて部下の兵隊を一々見舞つて居りましたな。

◇：それから大橋といふ、足の甲に銃創を受けた少尉がりましたよ。傷口もふさがつてからですが、湯に入つてよく揉んだらよからうと言つてやつたら、あの酷暑のときに、一日四回宛も湯に入つてました。早く恢復して原隊に復歸したいとの氣持からですよ。

◇：さうだ、も一人廣部少尉といふのがりました。人見部隊に屬してゐた勇士で、名古屋高工の出身です。右の胸をやられてゐるんです。私も内地歸還をすゝめてゐたんですが、先生とても承知しないんです。内地へな

んか歸るもんかと、醫員や看護婦を大分困らせてゐたんですが、たう／＼先生飛びだしましてネ、北停車場から蘇州の原隊へ乗り込もうとするところを、やつとつかまへたのですよ。

その晩、兵庫救護班の連中と座談會を開いたとき、自分が此の話をもちだしたら、偶然にも此の三人は、兵庫の看護婦達が受持つてゐた患者であつた。

『あの土屋中尉ごのですか、ほんとうにあの方は部下思ひネ、お歸りのときは大尉におなりで御座いました。』

『廣部少尉ごのネ。お荷物をちやんと、先に原隊に歸る部下の兵隊さんに渡してあつたんですよ。それから石川醫員ごのに八時過ぎに渡してくれつて、同室の患者さんに手紙を置いて行かれたんですの、その手紙を早く見つけたんで分つたのですよ。』

『大橋少尉ごのはお氣の毒で御座いました。やつぱり人見部隊でしたが、あの方は三度も出られたんですけれど、最後に胸部貫通銃創で、たうとう名譽の戦死をなさつたんです。岐阜の大垣の方で御座いました。みんな立派な軍人さんでした。あんな軍人さん達には、妾達もごんなに勵まされましか知れませぬ。妾達も爰に來てほんとうに真い経験を致しました。お國の爲に自分のことも家のことも、すっかり忘れることの出来る修養をいたしました。全く兵隊さんの御蔭だと思つてゐます。』

と盛んに感動をばづませて座談會は何時果てるとも解らなかつた。

上 海 (二)

陸戦隊本部を訪れて

陸戦隊本部を訪れた。そして特に屋上にあげて貰つて、當時實戦に参加された兵曹長の説明をきいた。まつききに驚かされたのは、屋上に突きぬけたところの階段塔に残されてある無数の弾痕だ。すでに誰でも知つてゐるやうに僅二千有餘の陸戦隊員をもつて、此の廣大な共同租界を護り終はせたのであるが、當時の支那軍は五萬餘と稱せられ、三角形の二邊は完全に敵の包圍線であつたのだ。陸戦隊本部の東北地點に在る人家やその他の建物が



部本隊戦隊いし々生も痕弾

たゞ一つ殆ど満足な？が残つてないのを見ても、日本軍の奮闘の凄じさが察せられるが、如何に説明をきいても、二千ばかりの兵隊で、どうして此の三十倍にも近い大敵を叩きのめし得たのか、自分達には仲々呑みこめないのだが、たゞ陸戦隊員が、此の非常な危機に際して如何に沈着であり、如何に勇敢であつたかは、どんな言葉も能くこれを形容し得ないものゝやうに思ふ。例の圖書館と商務印書館は、此の屋上から餘り遠からぬ西方に見えるが、無残な破壊の



昔到班護救赤日

その姿は、今でもバンザイを叫んでやりたいやうだ。屋上から降りて見たら弾痕は所々に見られたし、更に隣接した民家の屋根は、爆弾で破壊されてゐる。しかし陸戦隊本部は、無数の弾痕はあつても、たゞ一ヶ所崩壊したところもない。自分は表に出て、改めて此の巨大なる建物を下から見あげて、何か嚴肅なものが胸に印せられるのを感じた。

我れ乍ら頼もしい看護婦達

吳淞への途中、日赤救護班が〇〇棧橋に着くのでこれを迎へた。自分達が國を出るとき、銃後の多くの人々と共に見送つた救護班だ。上海の埠頭でこれを迎へて見ると、亦別な感激があるものだ。一行は〇〇名で黒の制服で何れも張り切つた姿だ。彼女等は先任者と交替するため、〇〇、〇〇、更に前線の〇〇、〇〇方面へ行くのだ。一同棧橋で勢揃ひしてから、自分達の團長である北川軍醫大佐から激勵の訓示を受け、それから次々にトラックに一班づつ分乗して、手に手に日の丸を肩しながら、棧橋を走り出すのであつたが、彼女等に乗せて來た病院船に乗つてゐる日赤看護婦達は、白衣の姿で舷側に總出をして『行つてらっしゃい』『しつかりやつてネ』『頑張つてネ』そ

して最後に、「パンザイ」の感激を浴せかけて送り送られる光景は宛ら兵隊さんだ。頼母しいなと思つた。

上海戦蹟断片

自分達の車が、廟行鎮の入口に着くと三十名もあらうと思ふ、子供達が汚たない姿で、どこからともなく駆けよつて来た。そして『シーサンお金進上、シーサンお金進上』と喚くのだ。先生様お金下さいといふ意味だ。自分達は、一袋十銭で買つて来た豆や甘納豆を、バラバラと分けてやつた。三十人も居るので、仲々容易でない。段々なくなつて、しまひざわになると、僅の豆粒に五人も十人も手をのしあげて来る。丸で奈良に行つて鹿に煎餅をやるのと同じだ。最後には、うるさくなつて自分も他の人も逃げ出した。すると又、彼等は追ひかけて来るのである。



お菓子に集るる子供

中に小さな子供を賣うた十歳位の女の子があつた。これはまた特別にうるさい子供で、盛んに唄をうたつてはねだるのである。みな日本の唱歌だ。チロジニアカク、シノマルチヨメテ、アーイチヤマチャ、シホンノハタワ。シーサンお金進上——お金はないよ、といふと今度は又、カツテクルシヨトイチヤマシヨク、チヨカツテクニヨチ、テチャカラワ、テガラタテシヨニ、カイリヨリヨカ、シー

サンお金進上だ。とてもうるさい。吳淞に居た子供は可愛らしいので五銭やつたが、此の子はたゞ淺ましい氣持を起させるばかりだつた。

戦跡には、よく圖解してあつたので、爆弾三勇士の最後の場所や所屬部隊の奮戦の様子が、頗る明瞭に分り満足した。三勇士はじめ犠牲部隊の人々は今次事變で漸く、その英魂が慰められたことだらうと思ひながら、恭しく冥福を祈つた。

大場鎮は、すでに今次事變の戦役勇士のため表忠塔が建てられ、境域も嚴かに劃されてある。こゝは上海戦の大激戦地で、表忠塔の背後には、敵が残して行つた未完成のトーチカもあり、更にその背後の塹壕には敵屍の残骨が、今なほ散亂してゐるありさまだ。表忠塔の右手にクリークがあるが、あとはたゞ、一望千里とも言ひたい廣漠たる大平野だ。敵も味方も互に堂々の戦ひを張り得たところだ。たゞ寡兵と多兵とで日本は武器よりも戦略數よりも魂をもつて勝ちとつたのである。此の戦場の附近の樹木は、弾のために折倒されてゐるもの多く、竹藪すら、散々に折枯れてゐるのを見た。

上海の、あの有名な市政府は、野っ原にボツンと建てられたものであることを、来て見て驚いたわけだ。然しそこに、蔣介石の遠大な、圖太い計畫が知らしめられる。野っ原とは言へ、既に大規模の都市計畫があつて、幹線道路が既に完成し、若し舊大上海から、江灣、大場を擁する大々上海を建設するとせば、此の市政府は決して偏してなご居はしない。更に大觀してみると、吳淞から廟行鎮までも入れて、大々上海を建設するとしても、

何等の自然的障壁があるわけでもないのである。恐らく此處は世界最大の超大会をつくり得るところであらう。揚子江を動脈とする支那大陸のづうたいに結びつけて上海の發展的運命が、そこまでもつて行かざるべきであることを知るのである。そしてその重大な役割に任ずるものが誰であるかは改めてきくまでもないことだ。

抗日テロの本場

同じ共同租界でありながら、蘇州河を一つ渡つて向側のバンドが、日支事變ご吹く風の大維閣の賑はひだ。一種奇妙な感じである。江上を見ると、各國の軍艦が何れも堅く錨を降ろして威嚇的に巨砲を見せてゐるとしか思へない。事實列國は、その巨砲の下で公々然と自國の物資を、幾層となく揚げおろしてゐるのである。上海戦の砲、虹口サイドでは、徹底的燈下管制をしてゐるとき、彼等の中の英佛の軍艦では、煌々と電燈を點じ敵機の襲來に一方ならぬ便宜を供與したものであるとは、今でも、はげしく言はれてゐる。例のサッスーンの根城は、さして巨大な建物でもないが、その邊一帶は實に豪壯無類のビルディングの林立だ。大上海に倨然としてその偉大なる支配力をもつ彼の存在を象徴するに十分なる巨觀だ。

蘇州河を渡つて見なければ、上海は分らぬといふ。例のテロの本場だが、虎穴に入らずんば……である。制服では危いぞと言はれて背廣に着かへて出かけた。永安コンスといふのは素晴らしいデパートだ。入口に夕刊賣りが叫んでゐるので一枚買つて見たら、支那軍の戦捷などを、大活字で報道してゐる代物だ。コンスの中に入つて

見ると、實に絢爛豊富な商品の陳列だ。そして、よくも、こんなに安く賣れるなと思つた。尤も草紙工だ。此の素晴らしいデパートには、映畫場もあれば、ダンスホールもあり、なほ幾つかの芝居、万歳、曲藝などの舞臺がそつちにも、こつちにも、造られてゐるのである。そして、いはゆる暗の女なるものが、此のデパートの中を、モーションをかけながら、公々然と流して歩くのだから、驚かされるではないか。

自分達は、此のコンスから出て、彼のメイン・ストリートを見たのだが、どこへ行つても、兎に角大へんな賑はひだ。ごこの大道にも、例のモーション先生は、泳いでゐるのである。店舗はたしかに立派なものだ。奥深く店の商品は充實してゐるのを見た。これに太刀打ちして行くのが、東亞新秩序建設の一つの項目でもあるなと思つた。

ある通りで、一人の支那人と、すり違ひざま衝きあつた。自分は、内地に居るときと同じやうに、軽く失敬といふやうな氣持ちで、通り過ぎようとした。ところが、心外にも此の男は、何とか言ひながら、つかつかつて來た。断然、攻勢をとつて來たのである。自分は體裁よく避けたのだが、彼は二間ほど衝き進んで來たのである。こんなことは、吾々日本人の既成觀念を破るものである。自分は明かに、彼の態度は、反感と優越感の發表であり、いはゆる共同租界の對日觀念をバックにしたものと、断ぜざるを得なかつたのである。

力強い興亞の歩み

南京への汽車

上海から南京への急行は、一日一回だといふので、自分達は、十時五十分發の急行車に、北停車場から乗り込んだ。北停車場は日本軍から散々爆撃されたところで、今は荒涼たるものだ。停車場附近も破壊の跡が物凄く多いものだ。停車場を出たら、民家の附近に大きな壘が澤山掘り出されてある。何れ廢物なんだろうが、何に用ひるものか、あまり大きいのと、数が多いのとで見當がつかぬ。

沿道の畑には、蔬菜が青々とのびてゐる。此の邊は元から青物の産地だといふことだ。でも去年の今頃は、此の邊の畑は全く荒れ果ててゐたが、避難民が歸つたものと見え、殆んど九分通りも作付が出来ると、自分と向合つて乗つてゐる丹陽官撫班の原田といふ人の話だ。間もなく、眞如の無電の鐵塔を、右手に見たが、此のあたりから急に青畑になつて來た。そこから鎮江までは、急行で凡そ五時間ほどのところだが、殆んど夢ばかりだ。蘇州から杭州へかけても、夢だといふことだ。全く夢の青野ヶ原だ。山も少いし、土地に起伏もあまり多くない。たゞ、渺茫として果しない夢の海原だ。見るから太平洋のシンボルだ。戦争などどこにあつたといふ觀だ。そして楊柳の美しさよ、夢の海原の單調を美化する綠の春風。自分は殆んど、これに恍惚として、無錫に來て始めて我に還つたやうな氣がしたのである。

宣撫班の苦心

無錫から常州へと、當地の戰況を思ひ浮べながら、數時間たつ間に、側の原田氏から色々な話をきくことを得た。支那人も可愛いと云つてゐるが、原田氏は語るのである。人情は同じです。可愛がつてやるとなじみません。私の所では醫療もやつてゐます。醫療が一番です。まだ敗殘兵の澤山居たときです。彼等は隨分良民を痛めたです。ヒドイのになると、婦人の身體にローソクで火をつけて金を出させたです。背中を焼かれたのも數人ありました。それを懇切に治療してやりました。シーサン、シャシャノ、シャシャノと言つて、泣いて喜ぶですよ。仕事も與へてやります。避難して來てるものもあるから、それを歸らせませす。上海からの避難民を、丹陽から初めて連れて歸つたのは、私でしたが、あの時は實に困りました。六百人からの人間です。上海に着いたときはもう眞暗でした。どうしたものか連絡がとれなかつたので、此の人々をどうすることも出来ないのです。仕方がないので、あの驛前の廢墟に、ごん／＼入れてやりました。そして自分は、あの暗闇の中を一人で、自分の宿所まで歸つたのです。當時は、まだ治安も今のやうでなく、所々で兵隊さんに「誰か！」とやられるし、了ひには泣きたくなりました。しかし、あの頃から見ると、上海も随分賑やかになつたものです。それを考へると逆も嬉しいですよ——。

原田氏は九州の人だ。若いとき何にならうかと迷つたが、日本では、どこもかも行詰りのやうに思へたので、

決心して満鐵に入つた。それから滿鐵に十五年勤めて、事變と共に、宣撫班に働くことになつたのだといふ。
『赤にカアれた知識階級で、良民に歸つてる者も、あるだらうと思ふが、彼等は今、どんな風に考へてゐるのか』との自分の問に對して、

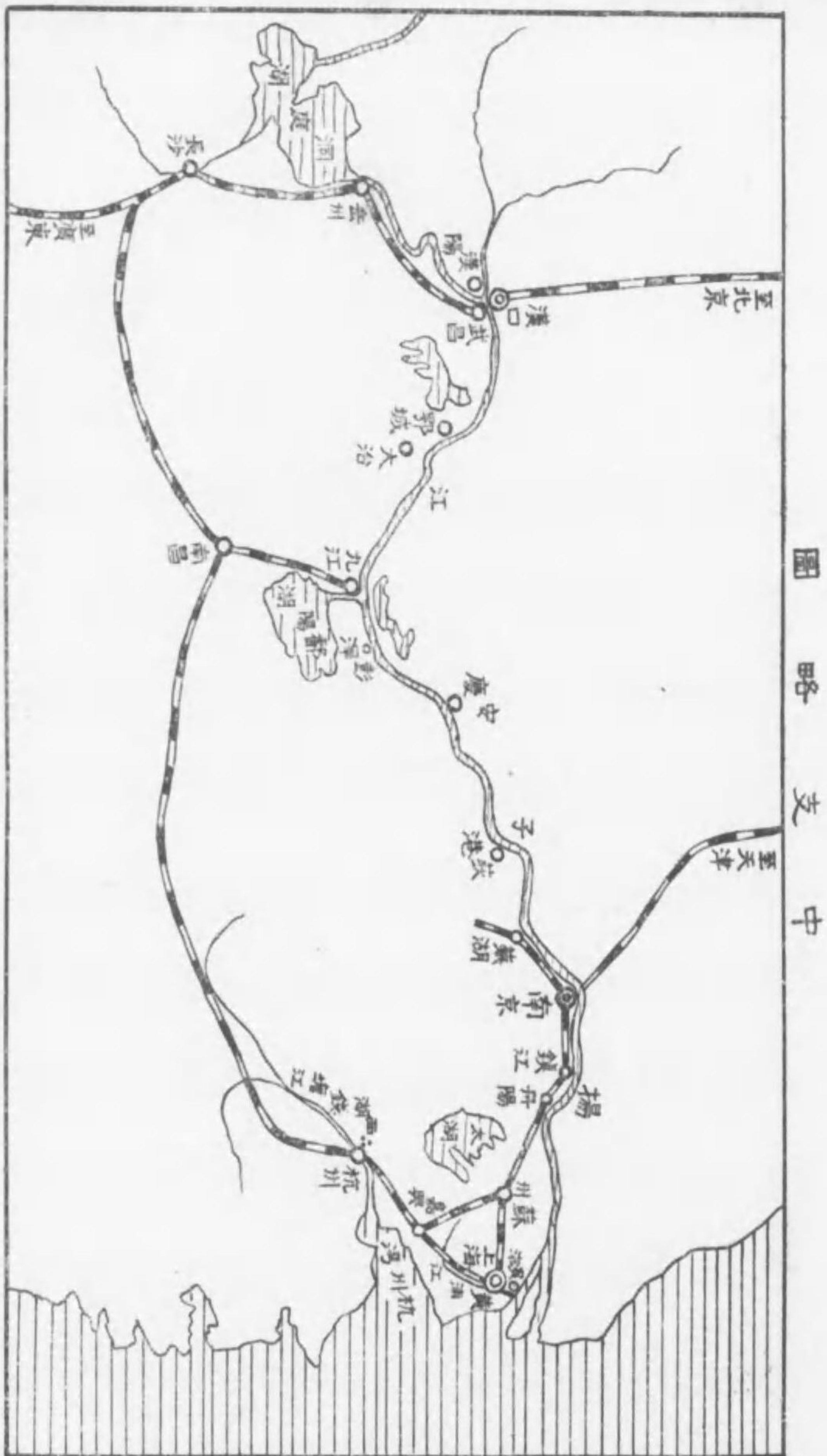


てに協車停京南

『丹陽にも、そんなのがありますよ。しかし、赤は一般に嫌つてますね。此の地方のものは、赤はいけないものだと思つてますよ。だから、赤にカアれてゐたものを嫌ひますネ。周囲がさうだから、本心を出しませんネ。しかし、何と言つても、今は何事も駄目だと思つてるやうです。實際またダメですよ』
『そんな連中は、蔣介石をどんな風に思つてるのですか』
『矢張り偉い人物だと思つてますネ。たゞ英・米・佛に蹴らされたと考へてゐます』
『丹陽は市でか』

『いや、丹陽縣の縣城ですよ』
『丹陽縣はどれ位の大きさですか』

『こちらの縣は小さいですよ。さうですな、江蘇省全體で九州の二倍もありますかな。それで八十縣ほどに分れてゐますからね。それで凡その見當がつかませう。丹陽縣全體で、徴收する税金は、八十萬圓位ですからな。そ



の半分を省政府に納めるのですよ。こちらでは縣税と省税を分けて居ないですよ。一本で取って分けるのです。行政は今全部、維新政府の系統でやつてゐます』

丹陽は上海から急行で四時間で着くところだ。原田氏は、もう丹陽に着きますよと言つた。これでも住んでゐると、自分の家に歸るといふ氣持ちで嬉しいです。上海の停車場に降りても、知つてゐる人と減多に會はないが、丹陽に歸るとみんな挨拶してくれるんですよ。住めば都で、殊に支那は自分等には住みよい所と思ひますネ。汽車がいよゝ丹陽驛につくと、原田氏は背廣姿にトランク下げて、本當に自分の故郷に着いたやうに、ホームを出て行つた。

ある將校の心配

原田氏の隣にゐて、原田氏の話を黙々と聞いてゐたのは、山田部隊の石川少尉だ。原田氏が降りて汽車が走りだすと、内地の人々はみんな一度来て見るんですな。内地に居ては、此の氣分は分りませんよ。眼界をよつほど大きくして、長期建設にかゝらなくてはネと、ぶつきら棒に、しかし力強く、殊によると、憤慨でもしてゐるのではないかと思はれるやうな言ひ振だ。

だから自分は、銃後の國民に對して、何か希望がありますかと、率直にきいてやつた。すると、經濟のことが心配ですよ。戦争をしてゐると、毎年五十億づゝは使ふのだが、經濟の方はどうなんでしょうかネとの質問だ。

自分は通貨や、公債消化の状況を話し、統制経済が、漸次合理的に運んで行かれるであらうこと、今後は特に貿易政策に官民の力がはいるべきであることなどを話して答へた。現地の皇軍の人達がどんな疑問を、希望を不満を抱いてゐるかを知らぬことは、自分達にとつて極めて必要なことだと思つた。

南 京 近 所

鎮江の近くに來つて、大陸も漸く緩慢な起伏の水田地帯に入つて來た。鎮江に至つて自然界の面目一變した。上海以來初めて揚子江に御目に懸り、一方には、如何にも要塞たる山を控えてゐる揚子江を距て、遙かに高塔を望み、一見要鎮たるを知るに十分なところだ。

揚州はこゝから北にあたり、地圖で見ると案外近いが、相當距離があるのだらう。こゝは自分の可愛い、姪の夫が、南京波洋爆撃の折に、自爆を遂げたところだ。殊勳甲の手柄をたてゝのことであつたが、軍人としては實に申し分のない男で惜しい人物であつた。もう少し働かせないで、ほんとうに残念ですと、繰返してゐる姪の言ふとほりだ。出發前に姪から手紙をくれて、揚州東邊方面の地圖まで書いてよこしたが、姪にとつては恨めしくもまた、懐かしい土地なのであらう。自分もさうした氣持で汽車のデッキに出て黙禱を捧げた。

鎮江から南京までは凡そ五十分だつた。紫金山が南京探題の鋭峰を聳やかしてゐる。いよく南京だ。何よりも先に眼に入るは蜿蜒たる城壁だ。延長が三十二哩もあるといふし、高い所は二十五米、幅も廣い所は十三米もあり、何しろ、明の太祖が七年の歳月を費して築いたといふ實にすばらしいものである。

新秩序への嬉しい發足

自分達が南京についたのは三月廿九日であつた。昨日、維新政府創立の初周年記念式が、すばらしく盛大に舉行されたと言つて、樓門を形どつたアーチや、街路を横断した懸垂布や、宣傳ポスターが至るところに昨日の盛大な記念式を見せてゐた。

翌日、自分達は、兵站病院慰問のために、彼の有名な中山路をはじめ、中山東路、北路、更に中正路から、中華門への純然たる支那街まで飛び廻つたのだが、もう戦争のあつたことが忘れられたやうな賑はひだ。して、こゝではテロなど暗躍する餘地は殆んどないのである。延長三十二哩の南京城がたしかに物を言つてゐるのだ。上海から、南京へかけての東亞新秩序建設の運動は、内地などよりは遙かに活潑であり、眞剣だ。みんなが、明確に此の運動の眞意義、目的、方法を理解してゐるやうに思へる。現地には無論さうした示唆と鞭撻と、壓力とがあるやうだ。街の賑はひは新秩序への嬉しい發足を意味するものであることは、言ふまでもないのだが、それは、たゞの樂觀的材料でないことも勿論だ。むしろ、現地日本人の、新秩序への眞剣な努力の反映と見るのが正しいであらう。彼岸への道程が長く、且つ容易でないことを國民に覺悟を促す資料と考へなければいけないと思ふ。

軍司令部に押火軍警部長を訪問した。少将は、自分達を引見するなり、赤十字の救護班は實によくやつてくれた、ほんたうに感謝してますよと自分達を喜ばせてくれた。そして、自分達は、南京から前線は、軍の指示に依ることになつてる旨を話すと、ぜひ武漢まで行つてやつたがい、看護婦連中もそんなに喜ぶか分らない、随分えらい目にあつた連中だから行つて慰めてやるんだね、とすゝめられた。自分達一行の願ひもその通りであつた。

南京の自然と戦跡

赤十字魂の権化

竹内喜代子さんは、一昨年の九月、日赤島根支部から派遣された救護看護婦だ。日赤救護班員も、事變以來既に二十数名の殉職者を出してゐるが、亡きあと、これほご人々から惜まれてゐる人も少いであらう。

喜代子さんは、今郷里の濱田町で、収入役をして居られる竹内新作氏の妹さんだが、虫が知らせたものが、嵩山も穴道湖も妾には見をさめのつもりですと言つて、應召したとのことだが、幼い頃兩



使天の衣白るけ於に京南



士勇の衣白の京南……てび浴を光春

親を失ひ、そして二十六歳を一期として、未婚のまま、南京に客死したのだ。猛烈なコレラで、たつた六時間で死んでしまつた。眞に痛い限りである。

息を引取る直前、同僚の渡邊看護婦を呼んで、妻のトランクに、入つてる手紙を全部焼き捨て、くれと頼んだ。それ等の手紙の多くは傷病將兵からの御禮状だ。こゝに引用する暇もないのだが、手紙を通してみても、同女がどんなに献身的な氣持で、懇ろに看護に勉めたかが察しられるのである。南京で部隊葬を執行してゐた際、彼女の看護を受けて居た一人の白衣の勇士がそこへやつて来て、土下座して泣き悲しんでくれたとのことだ。

喜代子さんが、まだ應召する前、郷里の吉田小學校に學校看護婦をつとめてゐたのであるが、或るとき三年生の子供が、眞青な顔をして苦しんでゐたが、とうとう汚物を吐いてしまつた。まだ若い受持の先生がこれをみて、あゝきたない！と言つて、顔をそむけてしまつた。喜代子さんはこれと反對に、安心と喜びの色を顔にみながらして、あゝよかつた、よかつた、どんなにか樂になつたでせう、と言つて、さも當り前のことをするやうに、早速その汚物を片づけてしまつたので、若い受持の先生も、これにはすつかり打たれてしまひ、今更の如く自己に恥づるの氣持になつて、それから毎に、竹内看護婦の行ひを追慕し、敬行してると、本人が告白してゐるのである。

同女が如何に赤十字精神に凝つた、やさしい女性であつたか、どうかは三月號の主婦の友にも載つてゐるが、當時すでに新聞にも發表され、それによつて、彼女が、兵站病院に居たころは、氣の毒な兵隊さんに金まで與へてゐたことが明らかにされた。

激戦を物語る弾痕の南京

南京縣は揚子江の殆ど岸壁に在る。向ひが即ち浦口だ。獅子山は驛から千米もあるまい。そこに砲臺があるのだが、支那軍は今度の戦争で、それだけそれを役にたてたのか、自分達は、南京についた翌々日に、そこに登つて見たのだが、下關にはいつて来る艦を撃つに、これほど屈強の場所はあるまい。それに無数のトーチカと塹壕の跡だ。全山裝備の一大怪物的攻撃陣地だ。南京陥落時に於ける敵の遺棄屍體は、五萬八千と稱せられてゐるが、現地の人々の話では敵の損害八萬を下るまいと言はれてゐる。南方の中華門、光華門、更に東南の富貴山方面から、追ひまくられた敵兵が、なだれを打つて下關一帶に追ひつめられ、あはよくば獅子山を頼りに東北鎮江方面へ、また對岸へと逃れようとしたのだが、此のときは既に日本軍は鎮江から南京に廻つてゐたし、江上には海軍がグツと喉元を扼し



光華門の彈痕

てゐたので、敵は此處に身體全く谷まり、遂に殲滅的惨敗を喫するに至つたとのことだ。

南京縣のほとりには、さう物凄く破壊の跡は見られない。しかし光華門、中華門の城外一帯の地域には、満足な家屋は殆ど一軒もない。更に江南鐵道で中華門から城内に入ると、そこから維新といふ驛迄の沿線が實に慘澹たる戦禍の跡だ。臨坂部隊が一番乗りした光華門の突撃路は、恐らく當時のまゝなのであらう。城壁に登つて見ると、この城壁の幅は十米内外もあらうか、丁度その中頃に五十平方米ほどの、くり抜きがあり、城門のトンネルを眼下に見下せるのである。敵は此處で盛んに手榴弾を投げつけたさうだ。トンネルの中が、宛らアバタの如き弾痕で、見るから凄惨の極みだ。城門を降つたところに、敵屍の残骨、弾にむくれた鉄カブト、手榴弾の残骸、帶革、水筒の片われ等、等、激戦の跡を偲ばせる記念物が無雑作に掻き集められてゐるのも悲壯な氣持を抱かせる。

南京縣から、あまり遠からぬ大通りに、可なり壯麗を極めたるらしい相當巨大な建物が外壁をとめてばかりで内部が、がらん洞に破壊されてゐる。何の建物か誰に尋ねても分らなかつたが、恐らくは南京一の華麗な建築物らしい。無論荒鷲の好餌となつたものだ。何でも、蔣介石等が此處で軍事會議を開いてるといふ情報で、爆撃したとのことだ。日本機の爆撃の正確なことは、誰でも聞いてゐるところであるが、此の建物を見て、如何にも見事なものであることを知るのである。

美しい城外の自然



湖 武 玄

南京名所の五州公園とは、玄武湖一帯の勝景地の別名だが、玄武門を城外に出ると、城壁に沿って廣がつてゐる渺茫たる湖水だ。實に美しい水だ。此の湖水の中を蜿蜒として貫いてゐる長堤には、今宵々と嫩芽を吹きだした揚柳の古木が、並木のトンネルをつくり、樹間に輝く水の色、水に映る柳の影、遙かに紫金山が煙れるやうに見えるし、五州のうち梁州、翠州などの小島の近くには、書舫を思はせるやうな遊覧の小舟やら、漁舟やらが春の陽を受けて、迫らぬ動きを見せてゐる。そして水も、空も、柳も碧青としてゐる中に、漁舟に眞白い大きな魚籠のやうなものを、一つ宛載せてゐるのが如何にも美しく、梁州の小島を繞つて、縁滴るばかりに揚柳の細糸を垂れた中に、あづまの家を見るなど、何とも形容のしやうのない繪だ。蔣介石も此の湖水を非常に愛して居たとのことだが、宋美齡と共に此の湖畔を散策した得意の時代のことを、時々追想してゐることであらうなどと、餘計な思ひやりをしながらこゝを去つた。

中山陵

南京を去るに臨んで、中山陵を見送すわけにはゆかない。上海には素晴らしい中山醫院があり、漢口と杭州には中山公園があり、いはゆる中山路なるものは、南京にも漢口にもある。一寸目ぼしいこゝには凡そみな中山先生を恩に著てゐる。

中山陵は紫金山の中腹に建てられた巨大な白堊の建造物だから、南京のごこからでも見える。明の孝陵は中山陵への途中に在るのだが、此の孝陵から中山陵へかけての一帶の地は、なだらかな丘陵地帯で、喬木こそないが美しい原始林で、まことに平明なる美觀だ。時時、翠綠滴る中に桃も櫻も競ひ咲いてゐる。その展望の廣さ！日本なら文句なく國立公園だが、蓋し南京に住む人々に恵まれた、神の最大の饗宴であらう。蔣介石が中國最大の恩人として、中山の陵を此處に營むは決して偶然でない。

此の巨大な建物の空襲への擬装は、それだけでも仲々大變であつたらうと、來てみて驚かされる。今は其の擬装も殆ど取除かれ、偉大にして壯麗な元の姿を、再び取戻してはゐるものゝ、訪ふ人もたゞ南京名所の一として見學する人々の群に過ぎず、宛ら中山なき中山陵の感が深い。陵の殿堂から、廣々として長い參道を隔てた前門の邊りには、薄ぎたない支那の小供達が、繪ハガキだの、煙草だの、乾葡萄だのを賣りつけやうとして群つて來る。いよいよ中山の靈をアウトして單なる名所化する存在だ。

懐しい郷土勇士の樂書

陵の東南、ほど遠からぬところに九重の塔がある。二百四十八階段もある厄介な高塔だが、こゝで蒋介石が慶々抗日軍事會議を開いたと聞いて、遽に勇を鼓してみる氣になつた。登つてみると成る程、南京の内包外延ただ一瞬のうちで、防備を練るに正に風強の場所だ。兵隊さんも此の塔には随分澤山登つたものと見え、大へんな樂書だ。中に諸寄の増田定治君と、尖栗郡戸原の田中善太郎君の名前が見えた。樂書は決してよい趣味ではないが、こんな所で自分の縣の兵隊さんの名前を見ると實にうれしいものだ。

此の翌日漢口行の宜陽丸に乗つてからだが、こゝでも偶然に濱坂の田中多都美君、西谷長市君の二人の兵隊さんに會つた。樂書の名前を見てさへ無性に懐しいのだから、縮瑟漢々として、どこまで行つても果しもない揚子江のたゞ中で、自分の縣の兵隊さんに會つた氣持は、亦何とも名狀し難いものだ。早速此の二人の元氣な顔をカメラに収めた。歸國したら何はともあれ、これを焼付して二人の両親に送つて進めるつもりだ。

長江とところどころ

大揚子江を溯る

南京下關を出帆したのは朝の九時ごろだつたらうか。暮方荻港といふところに着いた。船は、こゝで今夜、假



揚子江を過る

泊するのである。南京から彼此、百哩あまり溯つて来たわけであるが、凡そ揚子江なるものゝ、如何に圖方もない大河であるかに、今更ながら驚かされた。

船は左岸に寄りそうて走つたり右岸に寄りそうて走つたりする。水路の關係に由るのであらう。河幅の廣いところは恐らく三千米も越してゐるのであらうから、船から遠い方の對岸は、たゞ茫漠として岸らしく見えるだけだ。堤防などといふものは有りもしないし、そんなものを造つても、此の巨大な大自然力の前には何にもならないのであらう。兩岸は全く崩れはうだいただ。崩れ跡をみると土ばかりで石や、砂利など更にお目にかゝらぬ。此の分では、年々河幅が廣くなつて行くばかりであらうと考へられるが、必ずしもさうでないとの事だ。

途中、軍艦や、大小の汽船に、すれちがつたり、追ひこされたり、小さい帆船の、よたりよたりと動いてゐるのに時々出つくわしたが、兩岸の風光は、まことに千里同風で、往けども往けども、只果しもない楊柳の丘だ。しかし楊柳も今は青々と新芽を吹いて、兩岸は全く翠緑の連続であり、濁々たる江流を潤して、實に美しい眺めだ。楊柳の間には、極めてほつりほつりと、蕨茸の民家が見える。望遠鏡で覗いてみると、實に原始的な、みずぼらしい家ばかりだ。所々に大きな四ツ手綱を、岸邊に降ろしてゐるのを見た。沿岩には漁をして暮してゐる者

も妙くないのであらう。

涯しなき單純な眺め

蕪湖は流石に大きな都邑らしく見られた。凡そ百哩にあまる通航で見られたたゞ一つの變つた風景であつた。翌日は又大通、安慶などを途中に見て、彭澤の少し上流まで泊つて泊りとなつた。朝荻港を立つて間もないころであつた、さなきだに向ふ岸の様子が分らず、水々しく美しい楊柳の兩岸ではあるが、往けども往けどもたゞ蜿蜒漠々として、涯しもない單純な景色に、昨日からもうそろそろ倦み疲れて来たのであつたのに、今日は又雨だ。兩岸はいよ／＼茫として遠い方の岸は、時々見えなくなつてしまふ。テツキには雨がしとしと降りそ、いでるのであるが、それでも窮屈な船室に退屈してみんなが雨の中に出て来る。でも長いこと立つても居れぬので、ストーヴのある此の船にとつては、唯一のサロン——などは逆も名づけやうもない、言はず溜場のやうな室に、ぼつりぼつり集つて来るのである。

お互名前も知らぬ、さうした同志で、ストーヴを囲みながら、この先では敵が北岸から船を目がけて、能く弾を撃つて来るはなしが話題に上つて、こ



班護救るす行廻を江長

の船なども幾つかの弾痕のあること、赤十字の救護班を乗せた船も、命中は免れたのだが、前後に加農砲の弾を十六發も見舞はれ、よくも無難で済んだものだ。女が澤山乗つてゐたのだから、それは千人針と同じだからさ、などと冗談な言ふものも出て来たところへ、輸送指揮官の少尉の人がやつて来て、今日は此の上流で、敵が撃つて来るだらうと思ひます。何れ、も少し先に行つてその時ハッキリ申上げますから——と言つて、さつさと出てゆかれた。無論まじめ顔でかう言はれたので、敵の弾の音など一度もきいたことのない自分達は、流石に冷りとしたものが素早く頭の中を、かすめ去つたのを知つたが、そこに居た多くの人達は兵隊さん達であつたので、畜生！ また撃つて来やがるのかと言つたものゝあまり氣にとめる風も見えぬ。弾なんて全く運ですよ、とさうした氣持ちで片づけてゐる兵隊さんが、實戦を経た兵隊さんには多いやうである。

わが海軍の勞苦

安慶の少し下流の所で、日本軍の湖行を閉塞するために沈めた幾艘かの支那の船が、濁々たる流の中に、マストの先をブルブル震はせてゐた。此處には敵も十何隻かの汽船を犠牲にしたもので船の中には竹で造つたアンペラやうのものを何枚も積み重ね、その上に土を盛り、又アンペラを積み、更に土を盛るといふやうにして爆破も容易でなく念入りにやつたものだとのことだ。こんなものゝ啓開と言ひ、機雷の掃却と言ひ、沿岸要塞の粉碎と言ひ、長江に於ける海軍の勞苦と偉勳は、その巨大な兵站輸送の保障を思ふとき如何なる言葉も決して、これ

を盡し得ないことを思ふのである。

敵前の白衣勤務

四月三日の午近くに九江に着いた。南京を船出して三日目である。蘆山は、まだ雪化粧をしてゐた。陸々たる稜骨を思はせる山だ。

九江は、南潯線の起點で、揚子江と南支を結ぶ、長江筋第二の要津であるばかりでなく、南京を追はれた蔣軍

にとつては、武漢防衛の最大前衛據點であつたところだ。

自分達が九江に着いたころは、丁度南昌作戦の真最中で、市内の緊張振り、他のところとは大分違つてゐた。市内の建物にも、過ぐる激戦を想はせるものが多く、道路は雨あがりで、宛ら洪水のあとのやうな泥路だ。

こゝから蘆山までは二里しかないとのことだ。肉眼では二里どころか、ちき眼の前だ。自分達を迎へてくれた塚田大尉は、まだ、あそこには二三千の敵が、迫撃砲などをもつて頑強つてゐるんですよ。でも、此の間、こゝから加農の猛弾を浴びせてやりました。實に物凄かつたです。流石に奴等も沈黙しましたよ。と説明してくれた。



員紅護教赤日るけ岸を意敵に軍軍す航下

九江に来ては、自分達も、初めて第一戦的なものを味はひ得られたやうな気がした。驚いたことには、こゝに来てゐる日赤看護婦の寄宿舎は、蘆山の敵陣と真正面に向ひ合つてゐるのである。こゝを訪れたとき、どうだ怖くないか、と婦達に笑ひながら尋ねた。初めは怖かつたわ……でも、此のころでは、あまり感じませんわ。と濟ましてゐた。多くの兵隊さん達も同じことであつたが、戦地に慣れると、彈のあたる、あたらないは、運だといふやうな考へが、強く支配して来るらしい。年若い看護婦達でさへ、そんな氣持ちで勤務してゐるのが見られるのである。尤もこゝの婦達は、當初、南京から溯航して來るとき、例の貴地南水道で、江岸の敵から、十六發かの野砲をお見舞うけた連中なのである。こゝは、コレラで散々悩まされたところである。大事な看護婦達に痘れられてはと、婦達は戦傷者と特に重症の患者に附いて貰ひ、コレラの方は主として衛生兵と自分達で、眞裸になつて、やり通したと、部隊長の話だ。

看護婦達は、看護ばかりでなく、病院全體を救つてくれる。動もすれば、いらいらした氣分になりがちな現地病院の空氣を、なごやかにしてくれる。氣むづかしい患者も、重症で食物を欲しがらない患者も、彼女達の優しい言葉は、よく聽いてくれるのである。



班護教るせ着に江九

それに婦達は、兵隊の洗濯もしてくれるし、手紙の代筆もしてくれる。眼の不自由な患者のためには雑誌も読んでくれる。特殊患者のための栄養食の調査も彼女達の役目だ。さうした調法な、大事な婦達であるといふので、部隊長の特別な心遣ひだ。蘆山の敵の前に、面と向つて命がけの働きをしてゐる彼女達も、傷いた兵隊さん達に勵まされてゐると共に、部隊長の、かうした深い心遣ひにも大に勵まされてゐるのである。

水と大甕

九江は、何焼といふのか、陶器の産地だ。花園旅館の主人は此の方の趣味の持主が、色々と珍しいものを蒐めてゐた。九谷焼に似たものだ。この産業開發には、國民政府も本格的な力の入れ方だ。五十餘萬圓を投じたといふ素晴らしい工場と共に、支那では、全く破天荒の大甕井が、彼等の意圖の地々ならぬものを見せてゐるのである。井戸は深さが七十五米もあるものだが、一晝夜に千石あまりも湧出してくれるのである。日本軍にとつては何よりも有りがないものだ。

だが、此の井戸が、初めから發見されてゐたら、コレラに惱まされることも遙かに少なくて済んだのに、敵は、九江を逃げる前に、ポンプ場の一切の設



大甕の水

備を取去つた上に、すつかり、其の跡をカムフラージュしてゐた。今の設備は、南京から取寄せたものだといふのである。

上海を北停車場から立つて間もなく大きな空襲が、沿線に瀾山轉がつてゐたが、何に用ひるものか、自分達一行には全く解し得なかつたのだが、九江に来て、はじめてそれが分つたのである。

多くは二石位はいる巨大な甕だ。これに天水を貯めるのである。或は河から、沼から、これに汲たのである。そして、これを飲料にも、雑用にも用ひるのである。

食事毎に毒消丸

井戸は、無論所々に在るとのことだ。それは極めて少い。そして水質が、ごこのも良くないのだ。生では、支那人でさへ、飲まぬ習はしにしてゐる水だ。上海のホテルの食堂には、入口に膳廳と書いてあるのに驚かされたが、それよりも、食卓の上に、クレオソート丸が常備されてゐるのに、より驚かされた。南京ホテルに來たら、流石に無かつたと思つたら、クレオソート丸なら、こゝにも備へてありますよと、ボーイが、すぐ隣のテーブルから持つて來た。これが、何れも一流の大ホテルであるのだ。食事毎に毒消丸を服めと言はねばかりの不安な日に、故國の美しい水を思ふこと切々である。そして此の七五米の地底から湧いて來る九江の水にも、自分達一行は遂に誰も渴意をいやさうとは思はなかつたのである。

古今の愁を洗淨

九江から漢口へ

鄱陽湖は、紺碧の美しい湖水だ。上海以來、空色の澄明な流れを見ることの出来なかつた旅の者達には、實に眼醒めるばかりの雄大な美観だ……。



九 江 の 減 水 面

かうした誘惑には、深く心を、そゝられたのだが、第一時間が許さなかつた。四月四日、自分達は半日一泊して九江を立つたのである。船が、九江の棧橋から、遠く離れやうとするとき、港の街が、河の水平から、二十數尺も高いところにあることが、改めて見直された。減水期には、更に二十數尺も低くなるのだといふのである。揚子江は、増水期と、減水期とで四十尺の相異があるといふことが、はつきり分つたやうな気がした。此の日、大冶鐵山を左岸に見て通つたのだが、掘出された鑛石が、長い長い褐色の堤防を作つてゐた。素人眼にも、まことに頼母しい豊富さだ。船が進むに従つて、追々、沿岸に奇形的山々を見せるやうになつて來た。

遙かに右手に望むのは、言ふまでもなく大別山脈だ。河幅も、次第に何ほごか狭くなつて來るやうだ。此の晩、船は鄂城に泊つた。翌日、午前十一時ころ、いよいよ漢口に着いた。南京を出て、じつに五日目である。それでも此の船は大へん船足が速いのだといふのである。随分と長い、長い、そして、何と單調な船旅であつたのか。

でも、自分達は、何と廣漠たる大陸を見て來たのであらう。距離にして上海から殆ど一千軒だ。そして、これが一城一郭を落しつゝ、皇軍が攻め上つて來た縦の戦線なのだ。皇軍は、更にこゝから、今は百五十軒も先に進んでゐるのである。

漢 口 の 殷 賑

船が漢口に入ると、水上は、大小の汽船、帆船で非常な賑はひだ。丸で船の多いときの神戸港のやうだ、と誰やらが三嘆する。船は全く右往左往だが、何れも日章旗をなびかしてゐるので、内地の旗日に廻りあはせたやうな感じだ。たゞ、第三國船が、そつちに一隻、こつちに一隻と、釘づけしたやうに、ちつとしてゐるのが眼につく。

武昌、漢陽への渡船は、皆こゝから出るのである。自分達が、今し、はしけで上陸しようとするところへ、武昌からの船が、山のやうに乗客を満載して、勢よく滑りこんで來た。無論、支那人も澤山乗込んでゐた。

河岸には又、夥しいクリーが、荷物を運んだり、土を掘つたり、丸太を動かしたりしてゐた。バンドも兵隊さんに制せられながら、右往左往の人の動きだ。そこへ、そつちの船からも、こつちの船からも、續々と上陸の人々だ。自分達は、漸く此の混雑の人波を押し分けて、臨港路に脱け出し、そこから、例の洋車で、幾筋かの街を走りくねつて兵站司令部に着いたのだが、堂々たる建物が、楯比して、流石に中支第一の商都漢口——の印銘を深くしたばかりでなく、上海などは勿論、南京の賑はひも遙かに及ばぬ股賑さには全く一篇を喫したのである。

張り切る兵站



街市口渡るの標を販股

兵站は、元は何であつたのか、素晴らしく大きな建物だ。二階の廣間は、丸で講堂のやうにだゞつ廣いものだ。そこに、グループ、グループに、幾十かの机がズラリと並んで、兵隊さん達はとても忙

はしさうだ。これは第一線の脈膊だと自分達は思った。

室内を一瞥したとき、〇〇〇兵站執務準則と書いてある掲示にお互が眼を引かれた。

一、毎朝必ず宮城ヲ遙拜シ、皇軍ノ隆昌ヲ祈願シ奉ル

と、トップの一ヶ條を讀んだとき、自分達が、南京から乗つて來た船の兵隊さん達が毎早朝、甲板に整列して

皇居を遙拜し、次で長い黙禱を捧げてゐた行事を思ひ浮べた。

二、には

各自ノ捧グル忠誠ハ凝ツテ皇軍ノ偉大ナル威力トナルコトヲ銘記セヨ
とあり、以下次の八ヶ條だ。

三、陣歿將士ノ英靈ヲ敬弔シ、感謝報恩ノ誠ヲ致スヘシ

四、親切第一主義トシ、戦友ノ満足ハ我等ノ光榮ト心得ヨ

五、積極進取、機先ヲ制シ、他ヨリ督促ヲ受クル勿レ

六、上司ノ命令及指示ハ、直チニ實行シ、其ノ報告ヲ敏絶ナラシムヘシ

七、興奮ヲ警メ、冷静、事ヲ處シ、無慾恬淡、唯一途ニ忠勤ヲ擲テヨ

八、常ニ精神ヲ緊張シ、士氣ヲ旺盛ニシテ、健康増進ニ邁往スヘシ

九、上下相和シ、苟モ團結ヲ破ルカ如キ言動アルヘカラス

十、熱烈ナル銃後國民ノ期待ニ對ヘヨ

軍隊では、不言實行であると共に、有言は亦、心ず躬行である。この事務室の風景は、此等の言葉の忠實な體現であることを自分達に感得せしめるに十分であつたのである。自分達は同時に、此の十ヶ條を内地へ持歸るべく、真心の強い命令を拒み得なかつた。

防諜の必要痛感

此の晩、自分達は、長江ホテルに泊つたのだが、こゝでは亦、スパイ防止の注意で食堂には勿論、階段にも、廊下にも、便所にも、ピラ、ピラ、ピラだ。

スパイの、驚くべき敵であることは、現地に來て見て、一層長く分ることが出来た。

自分は上海に上陸以來、兵庫縣廳で最も篤學の一人であつた太田陸郎部隊長と、去年出征の砌自分の家に泊つてくれた尾上中尉と、比留間看護長と、此の三人に何とかして會ひたいと、至るところで其の部隊を尋ねたのである。

上海では勿論、南京でも分らなかつた。九江でも、ハツキリ掴めなかつた。漸く武漢に入つて太田君らしい部隊を突きとめた。それも、太田君の營舎を訪れて初めて太田君に違ひないことを確め得たのである。尾上、比留間の兩人は遂に分らなかつた。

何部隊か、どこにあるやら、現地の幹部の兵隊さんでも仲々分らないのである。それなのに、武漢失陥直前の支那新聞には今、武漢へ押し寄せて來る日本軍の一一の師團名から凡その兵團名とその兵力までも、ハツキリと



武昌昌昌樓

書いてあつた、これには全く驚きました、と太田君が話してゐたのである。

「書くな固有の部隊名」と戒しめてゐる。現地では、漢字は、表面的なものには殆ど廢止だ。序に現地に於ける防諜標語の二三を紹介して置く。

軍の秘密を自慢で言ふな

一寸待て言ふて良いこと悪いこと

コレ位と言ふた一言一大事

電話で話すな軍機の秘密

始末を忘るな紙屑を

知つたか振りは軍秘を破る

書いた手紙に軍事の秘密

そして最後に

護る秘密に搖がぬ國威

である。

人口七十萬の漢口である。もう失陥前の人口を超えてゐるのでないかといふほど、上海よりも、南京よりも恢復の早い漢口である。そして前線に最も近い漢口である。スパイの防止には一通の苦心であるまいと思はれる。

不落の堅陣を誇った武漢三鎮

武漢三鎮と言つても、漢口は商都であり、武昌は教育、漢陽は工業に特色をもつてゐる都市であるといふことだ。漢口と漢陽は地圖で見ると、はなれてゐない。揚子江をはさんで、武昌から眺めると、殆ど連続した一都會だ。武漢三鎮の敵が南京ほどにも持ちこたへず、腹いせに、無抵抗の日本租界を爆破したのみで、此所を棄て逃げしたのは、南京惨敗の経験を大に活用したものであることが分る。

不落の堅陣と頼んだ大別山脈が、突破されたときいては、南北江岸の快速部隊の進撃よりも、まだ怖れたのであらうが、それにしてもこれだけの防備をしてゐて、あまりに早く逃げ去つたものだ。



武昌防空壕

武漢に入つて見ると、漢口、漢陽の江岸も、向側の武昌の江岸も石堤を前に塹壕を開鑿し、其の背後には、直径三四間もある三層、或は四層の堅固なトーチカを築き、全く蟻一疋も通すまいとの防備だ。

その上、武昌三十二萬の大都會を、眞二つにしてゐる蛇山といふ其の名のごとく、蛇のやうに長い山があるが、日本軍が、この方面から攻めて来るとも、此の山に砲列を布いてゐる限り、全く指呼の

間に、撃ちのめし得る地點だ。自分達は、此の山にも登つて見たが、高射砲の跡もあれば、塹壕の跡もある。防空壕も、自由自在に繞らし、全く恐ろしく念の入つた装備であることに驚いた。揚子江に面した此の山の鼻先には、黃鶴樓の有名な遺跡があるが、元來こゝは、戦塵拂去の何かの古事來歴があつて、樓門の石柱には、

爽氣西來雲霧掃開天地憾
大江東去波濤洗淨古今愁

などと、彫りつけてあるのに、こゝから降りる石段の側壁には『無論男女老幼都要起守土抗戰』と大書し、更に街路に面した斜面には、蔣介石が堂々と白馬に跨り、民衆の大歡呼に迎へ、且つ送られて、青天白日旗を高く翻して、大奮迅する姿が描かれてあるのが見られたのである。

壯麗な武漢大學

有名な武漢大學は、武昌の市街から、郊外の野原を二里半も距てた珞珈山といふ、素晴らしい景勝地に建てられたものである。自分達が、内地で、小學校の落成式の祝詞などで、よく聴かされる、輪奐の美といふのは、本當は、此の武漢大學のやうな建物のことを形容する言葉でないかと思ふ。全く壯麗典雅なものだ。

山の麓に、東湖といふ湖水があつて、環境は實に雄大にして縹渺たる自然美だ。こゝは綜合大學で、農科のために各種の植物が、附近の五陵一帯に栽植され、山の中腹にはプロヘツサーのために、八十戸からの住宅が

建てられてあるといふので、あまり高くもない此の山の頂きを越すと、春の陽を受けた樹蔭、樹蔭に、氣持ちよい石屋根の住宅が、眼下に東湖の水光を臨んでゐるのである。

學舎の邊りには、滿目翠滴る楊柳の中に、豊麗な桃の花がひとり艶を恣にしてゐるが、櫻の満開であつた南京の中山陵一帶の景色と、共に其の美を競ふものであらう。

救護班の辭典に『不平』の二字なし

こゝに勤める日赤救護班は、恵まれてゐるとも言へるが、いまだに電燈のない不便さだ。そして、武昌の街へ出なければ何一つないのである。しかし漢口に居る看護婦達は、元監獄であつた建物さへ利用しなければならぬのである。

何れにしても、彼女達には、其の職責に『犠牲』といふ二字が嚴かについてゐるのである。だからどんな場合に於ても彼女等の辭典には『不平』の二字はないのである。武漢の部隊長達も、彼女達のいちらしくもまた、敬虔なつとめのありさまを、口を極めて賞めた、へてくれた。救護班の人々も、自分達が、かゝる賞詞をうけたことが、長の勞苦の何よりの慰めであつたに違ひない。



武 漢 大 學

かくして、赤十字救護班の活動は如何にと、自分達が上海、南京、九江、漢口、武昌と訪れた公式の用務は、至るところ、軍の人々の感謝の言葉をば受けつゝ終へたのである。

自分には、これまでの道中のことについても書き洩らした多くのことがある。更に、歸還に際して立寄つた蕪湖、蘇州、杭州のことは、一言も語つてゐないのだが、一先づ、こゝで擱筆することにする。

終りに臨んで皇軍の武運長久を祈り、陣歿勇士ならびに、殉職した日赤救護班員の英靈に對し、謹んで敬申の意を表す。(完)

從軍看護婦の手記

私達兵庫班は直ちに本院に配属されて仕事にとりかゝる。銃後國民が大場鎮陥落の捷報に沸きたつてゐる時、私達は前線から後送されて来る戦傷勇士の血みじろの姿に腐うたれ、應急救護に何もかも忘れる。どの兵隊さんも深傷の苦しみをこらえて、之位の傷で後送されたのが残念だとか、またよくやつた、傷はどうだ、早く癒くな



昭和十二年九月、令状を手にした時の感じは「時こそ来れ……」と言つた強い御奉公の念が身體中一杯になるのを覚えました。大場鎮陥落の二十四日前に上海〇〇碼頭に到着、私達の上陸を知つた浦東方面に蟠居する敵は、闇の中から盛んに銃砲彈の洗禮を浴せて、唸る彈雨の中での上陸第一夜は、覺悟してゐたものゝ、腑ふるひをどうする事も出来なかつた。

☆

病床の勇士・思ひは戦線へ

谷 水 静 子

慰問袋に喜ぶ髭モチャの顔

つて前線に歸らうと、戦友同志が勵ましあふ勇士のこの意氣に思はず頭が下がる。一日も早くもとの元氣な軀にしてあげたい、と肝に銘じ、自分達の任務の重大さを痛感する。

☆

下手な腕前でいくら落してもあたるものか、と多算をく、つてゐても敵機の空襲はやはり氣になる。防空演習のやうな譯にはゆかない。敵弾が近くで爆發する物凄いな音が破れるばかり。それもこれも、慣れるとそんなに意に介しなくなつたのは不思議だ。

ただ傷病勇士達にあれもしてあげたい、之もしてあげたいと氣はあせるばかりで、手が足りないのと夜の燈火管制とで充分な看護が出来ないのが悲しい。

☆

夕御飯は、たいがい冷たくなつてゐる時が多い。十八日ぶりの入浴にさすがに疲勞を覺へる。併し兵隊さんの事を思ふとなんでもない。病床に寝てゐても絶へず戦線に心を馳せて「敵は何處だ」「一番乗りは俺がやるぞ」と囁言を聞いては、疲れも苦しさもけし飛んでしまふ。

☆

慰問袋の中から人形、風船などが飛び出した時の兵隊さんの喜びやう、頭髮も髭もぼうぼうの勇士が、まるで

子供のやうにはしやいでゐられるのを見ると、母か姉のやうな氣持になつて涙ぐましいほど可愛く見えるのが妙だ。そして手紙でも出てきたら、何度か讀み返してニコ／＼してゐらつしやるが、人形も風船も手紙もない慰問袋を渡された兵隊さんはなんだか物足りなさう。

☆

元氣になられて戦線に復歸される兵隊さんの、満足さうなお顔に接した時の私達の喜びは最大なものである。それに反して内地に還送される重傷勇士が「残念だ、歸りたくない」と言はれる悲壯な言葉は、自分達の責任のやうに胸が迫り、泣いてお別れする。

☆

今では上海の街もよほど復舊した、内地還送勇士が「残念だ、歸りたくない」と言はれた言葉を私達もその儘言はねばならない時が來た。一年八ヶ月の間無事で御奉公出來たのも神助のお蔭です。傷つき病む勇士と別れるのが唯一の心残りであつたが、厚い感謝の眞心を身に餘るほど載いて歸ることの出來た幸せを思ふ。

泣きながら看護

大西しげの

上陸第一歩閣空に彼我の砲弾



今が今かと心待ちにしてゐた私です、念願叶ひ召集令状を手にした時の喜び、貴き使命に赤十字精神勃然と、早くも硝煙渦巻く戦線に心は飛ぶ。濃紺色の制服に身を固め、歡呼の聲に送られ、勇ましく出帆したのが〇月〇〇日、岸壁では何時までもく打ちふる日の丸の旗、東洋平和の爲ならば、なんで命がおしかろう……思はず感激の涙に臉が熱くなる。

☆

上海到着、閣の中をすかすと對岸がうつすらと見える。ドカーンといきなりの砲聲にビクリとする。敵は早くも私達に砲撃を集中する。わが軍艦からも之に應酬して、彼我の砲弾が閣空に交錯する。上陸開始、砲撃は絶間なく續いた。進みも退きもならず、怖いといふよりもただ小癩な敵に無性に腹がたつた。

☆

大場鎮の攻略が始まった。お、兵隊さん！この血塗磨はどうか、痛むだらうに破顔し「看護婦さん、世話かけますな」とおつしやる。泣けて泣けて、泣きながらの看護が最初の経験。戦傷に呻めき乍ら兵隊さんは顔に下痢を始める。便器がないので、有り合せのもので便の處置がまた一仕事、俄然大忙殺で夢我夢中のため、敵機空襲で隣の高い建物や、病院の炊事場に爆弾が落ちた事なども氣付かず驚かさずすんだ。

☆

暗がりの中で幾夜さか着のみ着のまゝのゴロ寝、暑くて汗臭くなつた手足の關節もだるい。甘いものが欲しい、湯にもつかりたい、いやいや兵隊さんにおいしいものを食べさせてあげたい……こんな事をうつらうつらとまごろむ間もなく、午前六時の起床ラッパ、起ればたゞもう兵隊さんに一日も早く快癒して頂いて、再び前線に送り出した念願で胸が一杯、だが不自由で思ふに任せない、相變らず砲弾のうなり、炸裂する音響、いくらでも撃つがよい。もう少しも怖くはない。ホンの僅ばかりの湯で身體を拭いたり、走り書だが内地に手紙を出せる隙ができるやうになつたのは嬉しい。だがより以上に日一日と恢復なされる兵隊さんの喜びを見るのは、私達の大きな喜びだ。慰問袋も届けられ果物、野菜も充分ではないが来るやうになつた。先づ重傷患者の口へ！おいしさうだ！何よりも有難い。

☆

十二年の暮、十三年の正月は私達には寄り付かなかつた。敵に備へる燈火管制はまだ續いてゐた。近ごろあまり砲聲がしなくなつたが、慣れた耳にはなんだか張り合ひ抜きの感じである。

三月になつて燈管が解除されて、電燈を仰いだ時の氣持はなんと云つていいのかわらない。さあもう手探りの看護ではない。本分に仕へてあげられる、嬉しい事だ。愈、歸還となると心残りやと安堵とがこつちやになつて萬感交々……思へば一年八ヶ月、ながかつた月日のやうでもあり、また昨日のやうでもあり、御奉公は何一つ充分に出来なかつた。埠頭を埋める歡迎陣に面映ゆい。新東亞の建設——大陸に銃後に私達の任務はまだ之からが大だと思ふ。

我慢強い戦傷勇士

西山 尚子

緊張に胸も裂ける第一夜

もはや祖國に捧げたこの身體、傷つき病む兵隊さんの手となり足ともなつて聖い職務を果してこそ、大君の思召しに叶ふ譯、もう何も考へまい、大陸に上陸するまでは銳氣を養つて置く事が何よりかんじん。

☆

眼前に見る大陸の間から言ひやうのない無氣味が迫つて来る。突如として耳をつんざく轟然たる音響にハツとする。何事もなかつた平和な航海が終つた直後に、早くも私達の生活環境に大變化が始まつてゐた。敵、味方の砲彈が文字通り十字砲火と飛び交ふ。緊張に胸も裂けるやうな戦場第一夜はながい／＼得處の知れぬもどかしさのうちに明けた。



となさる。このやうに強い兵隊さんが、決死勇敢の働きを物語る戦傷を負ふて、ところ狭きばかりに收容されて私たち看護婦の間に何十日も言葉も交さぬ忙がしさが續く。

少しよくなると『部隊に取り残されるのが残念だ、早く退院させてくれ』とまるで喧嘩腰の勇士も、私達看護婦には寛大で言ふが儘になつて下さる。兵隊さんも自身が早くよくなり、前線に歸りたいのですから、手當は割

☆

ひつきりなしに炸裂する砲彈の地響きに建物が震動する、飛行機の爆音が聞えた直後の震動はとてもはげしい。小銃弾も時々病院の壁にブスツブスツと無氣味な音をたて、つきぬける。運ばれて来る血と泥まみれの兵隊さんの数が漸く増してきた。我慢強い事は驚くばかりで、決して痛いとは言はれない。また呻き聲も聞えない、その代り残念だと叫び、之位の傷は大丈夫だと、重傷の身もかまはず起き上らう

合に順序よく運んで軽傷の方々がドシドシもとの元氣な身體になられて『お母さんありがたう。行つて来るぞ』と出て行かれる。わが手にかけた兵隊さんのうしろ姿を涙で伏しをかむ。

收容勇士の手當から、身の廻り一切を終へて、看護班の部屋へ歸るのは、たいがい夜中の二時、三時で着のみ着のままで寢床にもぐりこむ。起床は六時ですが、兵隊さんの事が氣掛りで、五時には起きて病舎に駆けつけると兵隊さんはもう眼をさまして『お母さん顔を拭いて下さい』『姉さん背中を掻いて下さい』と子供のやうにせがまれる。掃除、整頓がすむ間もなく食事の用意、この食事をあげるのがなかなか暇がかつて、漸くすむところでは週診の時間、私達の食事は朝と夕が一緒になつて、夕食も晩九時ごろになり冷たくなつてゐる。毎晩二人づつ宿直にあたつて、不寝番で病室の見廻りや火の用心、さては心氣極度に昂ぶる患者さんが、敵に備へる燈火管制もおかまひなく、マッチをすつたり懐中電燈をパチパチやるので、瞬時も油断がならぬ。上陸以來絶えざる心身の酷使にも健康でやつてゆけるのは、日頃訓練した赤十字精神のお蔭と、嬉しくなる。

暇に銃後の歓送

看護婦の活動に感激した荒鷺

受持患者の兵隊さんが雲隠れした時私たちの、それを探し出す心労は並大抵ではない。前線復歸を願ふ止む

に止まれぬ氣持から、私たちを困らせる勇士のさうした非常手段は、分り過ぎるほど分るのであるが——私たちの隙を窺つては、雲隠れしてしまふ。病院内隈なく探しても見付からず、ヘトヘトになつて途方にくれ、泣きたくなつてしまふ。やつと蜘蛛の巣だらけの床下から見付け出して、駄々をこねる患者をうまくすかして、ベッドにつれ歸るのであるが、それも大きな軀の兵隊さんの事ですから、他のどんな事よりも骨が折れる。ホットする間もなく、あつちこつちの病床から、患者が『お母さん々々』と呼ばれる。手當やお世話やお話し相手や、さつき申上げた雲隠れに對する氣配りに、自分たちの部屋に引揚げる頃になると、流石に疲れて、ものを考へる餘裕など、殆どなく、完全に參つてしまふ。そんな時に、元氣づけてくれるのは、出發の際に、熱誠な銃後の歡送者が『しつかりやつて来い』『お國の爲にガンバレ』と與へられた激勵の言葉であり、また暇に浮ぶ萬歲々々の日章旗の波の、感激的な光景でもあるけれど、それにもまして、重傷の將校が前線の部下を案じ、また息苦しい咽喉の中から、苦痛を訴へずに『責任が果せずすまない』と言はれる勇士、比較的軽い傷兵が重傷兵を助けてゐる友情、カサカサに乾いた唇から『チャンコロの彈丸で……畜生……死ねるもんか』と最後の聲を吐き出し、やがて『天皇陛下萬歲』と肅然と息を引きとつた胸迫る數々の、之等の言葉は『之位の事でへコたれるものか』と勇氣づけるのである。

☆

漢口空襲行に参加して、思ふ存分に敵軍事機關を木ッ葉微塵に爆砕されての歸途、不幸にもガソリンタンクに

敵弾を受け、歸還覚束なしと、一時は悲壯な自爆の決意をされたが、沈着にも最後の一滴のガソリンによつて、
○○基地に無事歸還した荒鷲勇士が或る病氣で病院に後送されて参りましたが、その勇士は至らない私達看護婦
の働きに、ひどく感動なさつて『之位の病氣で安閑としてゐる事は出来ぬ』と○月間の休暇をタツタ一日だけで
切りあげ、前線に向ひましたが、その時に勇士は、愛敬を自ら操縦して病院の上空で見事な高等飛行術を演じて
私たちに別れの挨拶をされました。

地上の勇士達もまた『看護婦でさへ、お國の爲に身體を投出して働いてゐるのだ』と續々と前線へ向はれたの
は、當然の私達の働きに對する深い同情に、心を打たれるのである。

☆

わが手で看護した勇士の中に、護國の英靈となられた方は別として、前線でもまた銃後で興亞建設の戦ひに活躍
されながら、恥かしい位の私たちのお世話に對し、今もなほ感謝のお手紙を寄せられる事は大きな喜びです。兵
隊さんへの慰問袋には、品物の吟味も結構ですが、畫龍點睛の意味に於て、銃後の熱誠溢れる手紙がその中に添
へられてあれば、兵隊さんの喜びやうはたとへやうもない位で、食り讀んで一字一句をどんな馳走よりも、先づ
噛みしめ味つてをられます。涙ぐましいほどに……。

精神力の偉大さ

岩井貞子

歸還命令を拒む勇士達



看護婦の天職は、如何なる病人に對しても献身的に盡し、回復せし
むるにあるのですが、日本赤十字社の看護看護婦は、ただそれだけで
なく、報國恤兵を經とし博愛慈善を織として、皇室の御仁慈の萬分の
一にも副ひ奉り、忠愛の誠をいたすを本分とし、總裁宮殿下の御
諭旨を戴き、社長閣下並びに養成の任にあたらせられる師の教訓は如
何なる艱苦をも忍び缺乏に耐えるにある。その使命とするところは戦
時救護の重大任務を帯び、應召すれば砲煙彈雨の中に生還を期せぬ覺
悟を培はれてゐるのである。この點に國民は理解を深めて戴きたいと思ひます。

☆

幾度か夢に見た召集令狀に接して、私は勇みたつた。生還もとより期せざるところ、私は父母に髪を切つて這

した。戦雲渦巻く上海——上陸第一歩の凄愴な光景は私の拙ない筆舌ではたうてい表現しうるところではない。文字通り實戦即應の燈火管制下に於ける手探り勤務、百雷一時に落下したかと思はれる夜毎の空襲、運びこまれる尊い護國の犠牲者が、苦痛の中から絞り出す鬼神も泣く愛國の言葉、この激烈にして崇高なる戦場の光景に、私たち看護婦の顔は緊迫した感情がむき出しに出て、硬った表情に眼玉が飛び出るほどである。

☆

藤田部隊の勝又砲兵軍曹は、私たちが上陸前から右肩胛部貫通銃創で、後送入院されておりました。是非とも大場鎮攻略戦に参加せねばならぬ……と、顔に一生懸命で痛むところを自らマツサージされて、(マツサージをやらぬと使へなくなる)躍起となられた甲斐もなく、大場鎮は陥落してしまひ、『残念だ々々』と口癖に言はれ、シヨケかへつてしまはれたので、私たちは自分の責任のやうに辛く感じました。其後もどうしてもうまくゆかぬので、一應の内地歸還命令が出ましたが、同軍曹は受けず、『之位の傷はなんでもない。前線に出して下さい』と大隊長を説き伏せ、大隊長自らマツサージの役目をお引受けになられて、念願通り前線に出られました。其後すぐ『前線に出たら傷の痛みを忘れた』と元氣なお便りをよこされ、今もつて奮戦されてをります。このやうに普通なれば再起も出来ないほどの傷も、何養！の精神力で克服されて病院から起上つた各部隊將兵の果敢の突撃は、南京に、杭州に、徐州に、漢口に、南昌に、次々と進撃、之を陥落せしめる、如何なる環境に置かれても、屈する事のない忠君愛國に燃ゆる大和魂の發露を、如實にまざまざと感じた事は言ふまでもない。

☆

苦しみあえいでゐる將兵の間に見る美しき友情、祖國の爲に、何ものをも恐れぬ剛毅な勇士の反面に、溢れるやうな人間味に觸れるのも、戦場なればこそ。敵に向ふ時は鬼神の如き勇士も、ひとたび病床に呻吟する身となると、懐かしの故國に残した父母或は妻子を思つてか、ともすれば沈み勝たぬのを、女々しい感傷だと笑ふ事が出来るだらうか、傷病癒えて前線に向ふ時の勇士の朗らかなさ、感傷の破片などは、もう何處にも見出せない。

☆

幸ひ各部隊長殿始め將兵各位の御指導により日清、日露の戦ひに幾多先輩の築きし輝やかしい尊き歴史を汚さじと、微力ながら私たちは使命の貫徹に努め、出發の時班員の半分位は戦場で倒れるものと覺悟して、死體を包む國旗を用意して行きましたのに、天佑にも病氣のため二名落伍者が出ただけで、今日まで無事に大任を果した事を感謝いたし、生涯忘れる事の出来ぬ最も尊い體驗と、感激をもつて大興亞建設の一員として微力を盡し、戦時日本の赤十字社看護婦に課せられた任務に邁進したいと思ひます。

終生忘れ得ぬ感激

清水 ちる子

身に餘る真心こもった言葉

私たちが救護看護婦の殆どが始めてのながの航海に、荒れたといふほどでもないのに船酔ひして、盛んに吐き物をして苦しみました。私もその一人ですが……弾雨をくぐつて上陸してからの勤務状態は、正直なところ苦しかったです。辛かったです。今にして思へばかよわい私達がよく耐えたとまるで夢のやうです。

☆



終生を通じて一番感激してゐる事は……昨年六月、〇〇部隊の大橋甲三歩兵少尉さん（岐阜縣大垣市出身）が右足の貫通銃創に破風傷をこちらせ入院されて参りましたが、頼りに「早く前線に出たい」と涙ぐましいほどの、歩行練習に餘念がない、そればかりか、少し快くなつて参りますと外出されて、自費で電気治療を受けに通はれるのですが、ひどい跛で再び前線に出られる見込みはなく、内

地還送りに内定してゐたのを、患者特有の敏感さからそれを知り、毎日のやうに私に「還送されるといふのは本當ですか」と鋭く追及になつて、それに對してどうお答へしてよいか分らぬので、モシ／＼する時などは不機嫌になつて、足を撫でながら「足一本位なくとも戦争は出来る」とつぶやかれるのに、私は胸をしめつけられる思ひでした。

☆

この勇士の愛國の心情を、武神も哀れに思召されてか、其後奇蹟的に跛も快方に赴き、九月十八日に原隊復歸を許され、喜び勇んで私にも「いろいろ無理を言つて、すまなかつた」と身に餘る真心こもった感謝の言葉を残されて出發、各所に轉戦めざましい武勳をたてられて、敵の心臓漢口へ漢口への進撃途中、十月七日に壯烈な戦死を遂げられ、忠魂永へに護國の神とられました。

☆

郷里には廿六歳のまだ若い奥さんと、いたいけな遣兒二人がゐられますが、奥さんから屢々至らなかつた私達のお世話に對し、感謝され、夫の遺志を奉じて、愛兒二人を石に嚙ぢりついてでも立派に育成されるといふ、武人の妻らしい健氣な覺悟のほども承つて、私も日本女性の一人としてかくあらねばならぬと、婦道の龜鑑と感激しお慕ひ申し上げてゐる次第です。

壯絶笑つて死地へ

石原てるる

戦傷を忘れ前線復歸を念願

自慢する譯ではありませんが、私たち兵庫支部看護班一同は、私たちが以前に召集されて、活躍された先輩、また同じ船で同じ日に砲弾の洗滌を浴び乍ら上陸した、大阪ほか十縣支部看護班の方々に、負けまいと一致協力、勵まし合つて力の限り精根を盡して頑張り、幸ひ所屬部隊長より名譽の感状を戴いて郷土の名を辱めず、大任を果し得た事を生涯の喜びとしてゐます。



☆

私たち配屬の本院は二階建てでした。以前より大分入院患者がおりましたところへ、大場鎮攻略戦で傷ついた勇士が運びこまれて参りまして、患者にはお氣の毒なほどの状態になりました。入院早々から苦痛に耐え、平氣を装ひ前線復歸を迫る勇士が續出して、看護班を困らせ、なだめるのに骨を折らせるのでした。今でもその方の

氏名を知らぬのを残念に思つてゐるのですが、前線復歸を願はれる大勢の勇士のうちで、タツタ一人だけが許されて出發する事になつたその日が、あひにく車軸を流す大雨でなんだか嫌な日でした。大雨のせいばかりでなくやはり虫が知らせたとも言ふのか、妙に胸騒ぎがして、たまたまなく氣持が一杯になり「晴れてからにしてはどうか」と泣かんばかりにしてお止めしたのですが「支那の兵隊ちやあるまいし、雨がこわくて出發を遅らせたとおつては男がたぬ」と、どうしても行くと言はれるので、私もせんかたなく握り飯をこしらへて差上げると「看護婦さんありがたう。行つて来るぜ」と元氣よく行かれたのに、それから間もなくその勇士が壯烈な戦死を遂げられた事を知り、笑つて死地に飛込む皇軍勇士の精髄に胸うたれました。

☆

其後も何もかも忘れてただ一心にお仕へした幾十人幾百人のうちの勇士が、前線に復歸されて抜群のてがらをあらはされた事を知つては、何かしら嬉し涙の溢れるのを覚え、また護國の英靈となられた方の面影を偲んで、今更ながらに日本民族の偉大さに頭が下がるのである。

☆

さきの上海事變で肉弾三勇士の名と共に有名な廟行鎮の戦いで、右大腿部貫銃創で入院された〇〇部隊の江川實歩兵少尉（福井縣出身）さんをお世話いたしました。熱烈に前線復歸を願はれた甲斐もなく、内地に還送される事になり、男泣きに武運拙なきを歎かれ、私にも武人の心中が惻々と追つて涙でお別れしました。行届か

なかつたのを責められもせず、有難いお手紙を度々およこしにされるのが喜びに堪へません。今後益々頑張らねばならぬ時代です、戦地の兵隊さんのほんたうに強い事をまざまざと見て来た私は、銃後の一兵士としてほんたうに強くあらねばならぬと思ひます。

眞に貴重な体験

救護班長 石川 正次

涙ぐましい班員の活動

一昨年九月廿五日に日本赤十字社十五救護班を編成して広島へ行つた時、上海には〇〇名のコレラ患者が発生して惨たる状況だとの事を耳にする。戦地へ行けるといふ年来の希望を満たされた看護婦さんの喜びに溢れた姿を見て、この救護班員中果して生還しうる者は幾名あらうかと、ひそかに胸の塞がる思ひがした。



上陸後大場鎮陥落まで廿四日間ありましたが、陥落までの時日の経

過のながかつた事はなんと言つていゝか、……筆舌の表現に苦しむ次第です。前線より後送されて来る傷兵に戦線の模様を聞いてみたが、誰もが黙して語らぬので一向に分らない、絶えざる、天地も震動する銃砲弾の轟音によつて、激戦を想像するよりほかはない。看護婦たちは頼りに『日本軍は一體どうなつてゐるのか』と私に質問するが私自身それを知りたいのだからなんとも答へやうがない。勿論日本軍が勝つてゐると答へるのであるが、看護婦たちは不満足氣に『頼りない班長』と私を眼で責めるのである。それほどに彼等の交戦は凄愴猛烈を極めたのである。遂に大場鎮わが手に歸すの捷報と共に、救護班員のそれこそ死にも狂ひの第二線奮闘が始まつた。小林まつみ班長以下廿名の看護婦は全く一體となつて働いてくれた事は感謝のほかはない。特に小林班長は深更二時、三時まで働き、朝は早く五時には病舎を見廻つてゐるといふ超人振が、一年と三ヶ月も繼續したので、感服のほかはない。昔から寝る時間が少ないのを自慢にしてゐた私ですが、小林さんのハリキリには完全に負けました。班長ばかりでなしに、看護婦たちもへこたれずよく頑張つてくれたので、意を強くした事である。

☆

畏れ多い事ですが、賀陽宮様から度々の有難きお言葉と御慰問とを賜り、班員一同この御仁慈の餘瀝を受け、た光榮を汚すまいと必死でございました。又神戸銀行副頭取牛尾健治様、灘區辰中通の三雲てる様、姫路の藤森様より度々御慰問品を戴き班員一同誠に有難く存じこの機会に本誌を通じ、重ねて厚く御禮申し上げます。

☆

私達に『戦場の感想は』とよく聞かれますが、私達がかわい女を主體としてゐる關係から、いろいろ甘やかされて聞かれるのではないかと反省されます。護國の英靈こそ戦争のほんとうの事を知つてゐられるのだと、心から冥福を祈るのみです。わが陸海軍將兵は、實に立派な、神に近い行動をなされた人達ばかりだつたと申す外はないのでありまして、私達は寢食を忘れて働いた苦痛よりも、それ以上に、勇士の方々から日本魂のいかなるものかを薫陶された方の感じが、幾百倍も強かつた。日本人として日夜を通じて、偉大な國を思ふ至誠に溢れた人に接しられたのを、實に幸福に思ひます。

私達は今回得た貴い體驗を基礎として、立派な救護員となるやうに努力する考へてをります。

☆

聖戦は何時まで續くか、恐らく支那人のあの蛇眼のやうな底光りのする眼で、我々日本人を見る氣持の消へ失せる日まで續くでせう。歸還して第一線の將兵の身の上の事を思へば、こんな平和な内地にゐるのはもつたないやうに思へます。看護婦たちは内地の陸軍病院に勤務しますが、一部は再び野戦氣院に勤める者もあります。

☆

私達もほんとうに働くのは之からと覺悟してゐます。一昨年戦地に出發の前夜に、絹の日章旗を購ひ求めた氣

持を、未だに生々しく持ち續けてゐます。こんど歸還に際しその國旗に各部隊長始め、高官の方々からサインをして頂きましたが、この思ひ出深い國旗は、私の生涯の唯一の指導者となるでせう。

愛
は
輝
く
を
は
り

昭和十四年十月廿日印刷
昭和十四年十月廿五日發行

【非賣品】

編輯人 井上敬二
日本赤十字社兵庫支部

印刷人 堀越儀郎
大阪市浪速區曾原町一八八ノ五
日本印刷製本株式会社

發行所 神戸市湊東區楠町七丁目十四ノ一
日本赤十字社兵庫支部

終

